



Title	Hypotheses fingo（仮説を虚構する）：ルーマンの不確定性三変化 その1
Author(s)	高橋, 吉文; Takahashi, Yoshifumi
Description	リスク・シンポジウム特集
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 61, 57-108
Issue Date	2011-11-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47574
Type	departmental bulletin paper
File Information	MSC61_004.pdf



Hypotheses fingo（仮説を虚構する）

—— ルーマンの不確定性三変化 その1

高 橋 吉 文

要 約

本論「その1」は、ルーマンの『社会システム理論』（1984）の意味論とダブル・コンティンジェンシー（二重不確定性）のトリックを明らかにする続編「その2」への前編にあたるものである。

ルーマンのシステム論は〔システム／環境／世界〕の三分を基本とするが、それと通底し照応関係にあるリスク論も、表向き提唱されている〔リスク／危険〕の二項対立図式ではなく、実際には〔リスク／危険／破局〕の三分が基本となっている。本論は、ルーマンのそうしたリスク考察やシステムを、破局世界に距離をとり、その巨大な災厄の襲撃をそらしすり替える（＝縮減する）ための抽象的な多重隠蔽装置として明らかにする。

その隠蔽の極意は、無限の不確定性・未規定性を有限で僅かの擬似的な不確定性へと根拠なくすり替える操作にあり、その後初めて、擬似的な不確定性（毒抜きされ馴致されたリスク）が可視化され、それを基底として意識（個人・心理システム）やコミュニケーション（社会システム）が産出される。

絶望的な暗黒世界の中で、人は、そのような根拠なきシステムを仮象として虚構する（Hypotheses fingo）ことで初めて生き延びるのである。¹

1 本稿は、2010年9月29日（水曜）18：00-21：00、北海道大学情報教育館3階多目的中講義室で開催された、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院主催のリスク・シンポジウム「遍在するリスク」Risk-Symposium：Ubiquitous Risksにおいて、発表5、発表者4人の最後に筆者が発表した「Hypotheses fingo（仮説を虚構する）—— ルーマンの不確定性三変化」（日本語）をもとに、大幅に拡大し書き換えたものである（Hypotheses fingo —— Luhmanns drei Verwandlungen der Unsicherheit in “Soziale Systeme” von 1984, Hypotheses fingo —— Luhmann’s Three Variations of the Uncertainty in “Sosial Systems” of 1984）。原稿が大きくふくらんだことから、前半・導入にあたる本稿を「その1」とし、それに続く本論部分を「その2」として、後に活字化する予定である。

目 次

- | | |
|-------------------------------|-----------------------|
| 1. 荒海や | 2. プラトンのアイデア |
| 3. 洞窟の比喻 | 4. リスク社会 |
| 5. リスク／危険／破局 | 6. 危険 Gefahr の両義性 |
| 7. 第二次オーダーへの回首 | 8. 多重隠蔽の必然性 |
| 9. 根拠なきを学び、広げよ | 10. 社会をシステムとして見る系譜 |
| 11. 破局の世界——盲目のディオニュソス | 12. ルーマンの〈システム／環境／世界〉 |
| 13. 「現実の絶対主義」と、抽象衝動の反抗 | 14. ありそうになさの公理 |
| 15. Hypotheses fingo（仮説を虚構する） | |

1. 荒海や

2011年3月11日、東日本および関東地域を突如襲った東日本大震災は、私たちを文字どおり震撼せしめた未曾有の大事件である。制御可能なリスク risk が、突如その戦慄的な正体をあらわにし、制御不能の危険・破局 danger へと変貌した瞬間である。科学的にはこのような災厄の襲来の可能性は、繰り返し警告されてきた。人類が生きている地球という特殊生態的環境は、宇宙や銀河の中において奇蹟的なバランスにより存立しえているものであり、そのバランスの中において多様な攪拌や災厄が、いつ何時起きても不思議はない（cf. 松井孝典『松井教授の東大駒場講義録——地球、生命、文明の普遍性を宇宙に探る』集英社新書、2005）。人類が制御可能と夢想した安全化された馴致されたリスクではなく、大自然の奔騰による破局（カストロフィ）襲来の方こそが、無力であわれな人類にとっての本来の状態なのである。

素朴な因果律が妥当する圏域である平衡系に対して、因果律が成立しない領域は複雑系科学において非平衡系とよばれているが、マーク・ブキャナン『歴史は「べき」乗則で動く——種の絶滅から戦争までを読み解く複雑系科学』（水谷淳訳、ハヤカワ・ノンフィクション文庫、早川書房、2009、第5章）や『複雑な世界、単純な法則：ネットワーク科学の最前線』（阪本芳久訳、草思社、2005）、アルバート＝ラズロ・バラバシ『新ネットワーク思考～世界のしくみを読み解く～』（青木薫訳、日本放送出版協会、2002）等の徹底的に関係性の中で事象をとらえる考え方によれば、地震や津波といった天災のみならず、疫病や歴史上の諸事象が、そのような非平衡系における予想不能、不可知な事象として提示される。予想不能とは、事象は必ず想定外となるということであり、些細な原因により唐突に大災厄や事態は発生しうる。その意想外性すなわち既成の知識ではありえない現象の出来を、ナシーム・ニコラス・タレブは、そのベストセラー『ブラック・スワン——不確実性とリスクの本質 上下』（望月衛訳、ダイヤモンド社、2009）において、黒い白鳥すなわちブラック・スワンと命名した。非平衡系の地平におい

て安全なものはもはやありえず、どのように些細な動きも、複雑にからみあった新ネットワークの網目の中にあつては、いつ何どき途轍もない破局を引き起こすか、予想することができない。つまり、今日まで安全で幸せでありえた者も、翌日には不意に殺される運命にあるやもしれない。おいしい食事をたっぷり与えられていた七面鳥が、明日もそれが続くと思いこんでいたら、クリスマス・イヴの日にはなぜか殺されている、という例によって、タレヴは非平衡性地平における不確定性をわかりやすく語っている。私たちは、素朴な因果関係が通用しえない非平衡系の乱流の中に巻き込まれておりながら、素朴にも平衡系が持続しうると思いこんでいる悲喜劇的な存在なのである。20世紀は、人類が地球という大地から解放されて天を見あげ、宇宙が眼前にひらけはじめた瞬間であるとともに、ある意味その事態の裏返しでもある非平衡系の不確定で摩訶不思議な領域への突入もまた開始した恐怖と栄光の時であった。20世紀初頭ブラハの作家カフカが、行間毎に不連続と奈落とをのぞきみていたように、私たちの一歩先もまた底なしの奈落であり、その未来はまさに五里霧中なのである。

ところで、筆者は、東日本大震災の直後、目下進めている新しい画期的な漱石研究の一環として、漱石に絶大な影響を与えた19世紀前半期の英国の思想家・歴史家トマス・カーライルの諸著を読んでいた。カーライルは存命中の英国ならびに漱石以後の日本において予言者のように読まれていたが、今ではみごとに忘れられている思想家である。だが、彼の代表作のひとつである三巻本の浩瀚な『フランス革命』（『カーライル全集第1～3巻 フランス大革命』柳田泉訳、春秋社、1925、大正14年）には、ニーチェさながらのディオニュソスの混沌の力が、奈落の底からマグマを激しく噴き上げては荒れ狂い、日常世界や理性、諸制度、人々を徹底的に破壊していく凄惨な光景がリアルに描きだされている。歴史書として書かれながら、今にいう史書というよりは西洋に伝統的な叙事詩的な性格の濃い傑作で、その混沌の力の破天荒で制御不能な蹂躪ぶりは、東日本大震災直後に東北地方海岸部をまさに魔物のように襲ってきた黒い大津波そのままである。

フランス革命という破壊と狂乱は、厳しい清教徒的家庭に育ったカーライルの眼には旧約聖書の峻厳なる神による正統なる審判として理解され、新しい清新な道德性を帯びた秩序は、そうした腐敗した欺瞞的な諸制度の徹底的な破壊の後に初めて、不死鳥として灰と瓦礫の中から蘇りはじめる、と把握されていた。すでに神の威光がゆらぎ、ある意味退潮しつつあった19世紀初頭、カーライルはあえて人間の歴史の中に神意の顕示を見ようとしたのである。しかし、その神意は徹底的に不可知であり、それゆえ人知をこえて忽然と姿をあらわし、仮初めに築きあげられてきた人間社会の制度や秩序を仮借なく蹂躪し、破砕していく。その意味で、破壊でしかない神意は、予想されうる不確定性としてという想定内のいわゆる「リスク」riskではなく、明らかに想像を絶する制御不能の破局・danger としてとらえられている。『フランス革命』という大著は、ずばり人知をこえた力が人類に破局をもたらす非平衡系来襲のみに照準をあわせ、叙述した、劇的で極めて現代的なドキュメンタリーなのである。

破局だけがある。大地と生態系にしばりつけられている人類にとり、その破局を制御しうる力も希望もありえない。それゆえ、災厄満ちる世界を何らかの形で制御し、地上に秩序を芽生えさせることのできるものは地上にはない、地上の人間に属するものではありえない。英国ケンブリッジ・プラトン学派やその伝統にある者たち、そしてカーライルにとって、地上に光を与えうるもの、それは唯一、プラトンのアイデアにのみあった (cf. 向井清『トマス・カーライル研究——文学・宗教・歴史の融合』大阪教育図書、2002、pp.86-88、エルンスト・カッシーラー『ケンブリッジ学派の思想潮流 英国のプラトン・ルネッサンス』花田圭介監修、三井礼子訳、工作舎、1993、原著は1953年の刊)。カーライルたちは、清教徒であるゆえ、そのアイデア世界をキリスト教的神とも呼んでいるが、その思考の実質がプラトンのアイデアに依拠していることは明らかである。それゆえ、大破局の後にもしも清新な秩序が芽生えうるとすれば、カーライルにとって、それはその超地上世界アイデアをのぞきこみ、その叡智と光を地上にもたらしうる天才を介してのみであった。アイデア世界を透視しえた者、その光輝の洗礼を受けた者のみが、廃墟の中に秩序を建立する天の知を有している。それがいわゆるカーライルの英雄 heroes なるものである。ひたすらディオニュソスの破壊をダイナミックに描いた怪物的な大著『フランス革命』The French Revolution (1837) に続いてカーライルが著した『英雄及び英雄崇拜論』On Heroes, Hero-Worship and the Heroic in History (1841) が、そうした蹂躪による廃墟の後に、その彼方に新しい秩序の再建を論じているのは、アイデアを奉ずるカーライルとしては当然の流れといえることができるかもしれない。その『英雄及び英雄崇拜論』は、アイデアの啓示を受けた天才たち（英雄）の時代による変容を確認することによって、ディオニュソスの破局におびえる人間たちの地上が光に輝く天のコスモス（調和）へと連結されている事実の持続を証明しようと試みた著作となっている（『カーライル全集第五巻 英雄及英雄崇拜論』柳田泉訳、春秋社出版、1937）。破壊の惨状のはるか上方の天空に、アイデアのコスモス（調和）が静謐に、かつ荘厳に浮かぶのである。

荒海や 佐渡に横たう 天の川 （松尾芭蕉『奥の細道』）

日本海をはさんで佐渡を遠方に眺め芭蕉が詠んだこの名句は、破局光景と天空のアイデアとを英雄（超世界幻視天才）によって媒介しようと構想した幻視者カーライルにとって、そしてまた東日本大震災という未曾有の破局に苦悶する現代日本にとって、形而上学的な希望のビジョンとして実にリアルに浮かびあがってくる。破壊に渦巻くディオニュソスの荒海という実相からは深く切れて、彼方の天空に壮麗なコスモスとして静かに浮かぶ天の川は、まさに絶対的希望を約するアイデア天界の光輝として現れているかのようである（図1）。

図 1

天：コスモス（調和）	秩序	アイデアの光	希望	☆
vs				
地：荒	海（破壊）	無秩序	暗黒の荒廃	絶望

図 2 ベル型曲線



2. プラトンのアイデア

しかしながら、近代から現代への転回点なすニーチェの思索（19世紀末）を通過した後の現代の私たちにとって、カーライルやその後継者のラスキンたちが志向したプラトンの天の秩序への異常な執着や信仰は、非常な違和感を与えるものでしかない。事実、プラトンのアイデアは、20世紀にはいると、西洋形而上学を導いた災いの根源として多様な批判を受け、現在において、アイデアが破局に対抗する希望として積極的に語られることはない。それどころか、その同じ19世紀初頭の英国では、カーライルたちの天への執着と併走ないしは照応するかのように、数学者ガウスによって秩序希求欲動のいわば地上の形態ともいうべきものとして、いわゆるベル型曲線、釣り鐘型曲線が発見され（図2）、確率論によるリスク想定とそれによる危険の回避や制御の手法が飛躍的に発展する。統計や確率は、基本的にはこの曲線に基づき、そしてその統計的曲線に発見された法則が、後の金融市場や保険制度等の原則となる。つまり、現代の経済、科学等の諸活動、諸制度を支え、近年注目をあびつつある多彩なリスク・コミュニケーションやリスク管理の数々も、畢竟するに、カーライルの頃にガウスが発見したこの魔法の曲線の図形に淵源をもつものなのである（ピーター・バーンスタイン『リスク：神々への反逆 上下』青山護訳、日経ビジネス人文庫、2009、第8章、瀬尾佳美『リスク理論入門 どれだけ安全なら充分なのか』中央経済社、2008、第I、IV章）。

20世紀にはいると科学や技術はさらに著しい進歩をみせ、自然に対する制御レベルも長足の進歩を示して、不確定性を確定化しうる魔法の呪文を手に入れた西洋近代社会とその継承である現代のグローバル社会は、大いなる凱歌をあげる。現代ドイツの思想史家ハンス・ブルーメンベルクが、大著『近代の正統性』において主張している「近代の正統性」を、それは証するものとなっている（『近代の正統性〈1〉世俗化と自己主張』1998、『近代の正統性〈2〉理論的好奇心に対する審判のプロセス』2001、『近代の正統性〈3〉時代転換の局面』、叢書・ウニベルシタス、法政大学出版局、2002）。

確率による不確定要素やリスクの制御に卓越した能力を獲得し、隆盛いやます現代、確率論等による地上秩序の構築の流れには逆行するカーライルたちが依拠していたプラトンのアイデア天界の威光が、では衰微したかという、実はむしろその逆で、電磁気、電磁波にもとづくIT技術とバーチャルな世界の増殖と席卷は、むしろ科学を天のアイデア思考の鋳型へと強力に引き寄せつつあるようにみえる。

たとえば、身体的・現実の「わたし」ではなく、ITの中、透明な不可視の電磁波の中を天使のように浮遊しうるバーチャルな「わたし」に本質的な自己を感じとる人々の急増や（鈴木謙介『ウェブ社会の思想：〈遍在する私〉をどう生きるか』NHK ブックス、日本放送出版協会、2009、第二章）、雲（クラウド）のはるか彼方の天界の巨大コンピューターに、地上に生きる自身のデータをすべて預け、そこにアクセスするクラウド・コンピューティングの登場と躍進等は、いかにもアイデアと現象界との古典的な二元対立を想起させずにはいないものである（cf.西田宗千佳『クラウド・コンピューティング：ウェブ2.0の先にくるもの』朝日新書、朝日新聞出版、2009、第四章）。真の知データは雲の彼方のアイデアにあるという構図、すなわち[真の知を全的に有する天の彼方／真の知は何ももたず、天の彼方にひたすら従属する（＝アクセスする）不能なる人々]、[真の知の在処である天界／真の知のコピーや断片の分身でしかない影たちの地上界]、というプラトン哲学でおなじみの構図（「洞窟の比喩」、アイデア天界／迷妄の現象界）が、この新奇のIT現象にもきわめて明確に現れている。

人類の全書物の電子書籍化を壮大に夢想するアマゾンやグーグル等の志向も、かつての西洋社会の一神教的使命感そのままであり、IT社会のいや増すりアル化にもかかわらず、あるいはより正確にはITの時代においてこそ、今や技術的には十分に具体化可能なものと化したことによって、アイデアへの深い志向を秘めた形而上学的図式が、西洋（アメリカ）を発信源として今やあちらこちらに顕在化しつつある。このように西洋世界の思考は、いかにそれを否定する大仰な反思弁的身振りをみせても、ハイデggerやドゥルーズたちがそうであったように（ジル・ドゥルーズ『差異と反復』河出文庫、河出書房新社、2007）、どこまでいっても結局は本源のアイデアへと立ち帰ってくる。西洋は、それこそ筋金入りのプラトン信者たちが群れる世界なのである。

それは、プラトン哲学のビジョンそのものが圧倒的な力を有しているからで、例えば、英国ケンブリッジ大学出の20世紀初頭の哲学者ホワイトヘッド（1861-1947）は、「ケンブリッジ・プラトン学派」の流れをくみプラトン主義を重視したが、代表作である大著『過程と實在』（1929）の第二部第一章第一節において、「ヨーロッパの哲学伝統の最も安全な一般的性格づけは、それがプラトンについての一連の脚注からなっているということである。」（『ホワイトヘッド著作集第10巻 過程と實在（上）』、山本誠作訳、松籟社、1984、p.66）と記している。すなわち、ホワイトヘッドは、西洋の哲学はすべてプラトン哲学への脚注に過ぎないと断言しているわけである。その著書の最終章となる第五部第二章の第七節では、「流動と恒常性との悪分離」（『ホワイトヘッド著作集第11巻 過程と實在（下）』山本誠作訳、松籟社、1985、p.618）に関わる「最終的なプラトンの問題」（同）は、一なる神と多なる世界との合一として解決され、多は一に、一は多としてあらわれるとされている。その数年後に書かれた『観念の冒険』（1933、『ホワイトヘッド著作集第12巻 観念の冒険』山本誠作、菱木政晴共訳、松籟社、1982）ともなると、西洋の思想史は、ずばりアイデア冒険史の様相をあらわにしている。

最高の思想家たちに取り憑いているアイデアのこうした強烈な呪縛力は、20世紀末にあっても揺るがない。例えば、異常ともいうべき博識を縦横に駆使して現代における形而上学の不可能性を隠喩の側から究明するドイツの異能ハンス・ブルーメンベルク（1920-1996）もまた、終始そのプラトンとアイデア、特にその「洞窟の比喩」に取り憑かれている。生前に公刊された最後の著作『洞窟からの出口』（Hans Blumenberg, Höhlenausgänge, suhrkamp taschenbuch wissenschaft 1300, 1989. 1996の使用）は、他ならぬその「洞窟の比喩」（プラトン対話篇『国家』第七巻、『プラトン全集11 クレイトポン 国家』藤沢令夫訳、岩波書店、1976）そのものを主題としたものである。そのブルーメンベルクとは一才違いで、戦後のドイツ演劇界を席卷したドイツ語圏スイスの劇作家フリードリヒ・デュレンマット（1921-1990）もまた、プラトンに強く魅了された一人で、その初期短編集『都市』Die Stadt (Arche, 1952) におさめられている「都市」Die Stadt (1947) 等の夢想的な諸作は、ミノタウロス神話の迷宮とグロテスクに重なる「洞窟の比喩」の迷宮性、不確定性、そして存在の悪意をモチーフとしている (Friedrich Dürrenmatt, Werkausgabe Band18. Aus den Papieren eines Wärters, Verlag der Arche, 1980)。プラトンの強烈な幻想力が、世界の迷宮性と世界把握とを同時に可能ならしめている。英国ロマン派やカーライル、ラスキン、マシュー・アーノルド、ウォルター・ペーターたちの19世紀であれ、ブルースト、ホワイトヘッド、カッシーラー、ブルーメンベルク、デュレンマット、ドゥルーズたちの20世紀であれ、また IT バーチャル世界猖獗する21世紀であれ、そしてまた、アイデアにいくのであれ「洞窟の比喩」の囚人にいくのであれ、プラトンによる呪縛にはまことに根深いものがあるのである。

3. 洞窟の比喩

特に指摘されることはないようであるが、ニクラス・ルーマンもまた「洞窟の比喩」の悲惨な囚人状態を、その思索の基本としている思想家である。彼が1968、1973（第二版）年に発表した明快な好著『信頼：社会的な複雑性の縮減メカニズム』大庭健、正村俊之訳、勁草書房、2007、第二版の邦訳、Niklas Luhmann, Vertrauen. Ein Mechanismus der Reduktion sozialer Komplexität, 3. durchgesehene Auflage, Flexibles Taschenbuch, Ferdinand Enke Verlag, 1989. 1973年の第二版に拠る）の中に開陳しているプラトン言及から、それは読み取ることができる。

世界の完全な複雑性に対して、複雑性を縮減する有効な形式を携えて立ち向かうという立場に身をおいて考えるのでないかぎり、人間は、プラトンが描いたように〔壁に映る〕影の〔見える〕洞窟のなかにとどまっており、すでに圧縮ずみの形態で満足せざるをえないのである。その〔ような超越論的な反省の〕際に問題になるのは、人の眼をくまなく射る

理念〔アイデア〕Ideen の証拠〔の光〕に持ち堪えることではない。そうではなく、間主観的なコミュニケーション過程をつう／じて、世界のより大きな複雑性を捉え、それを縮減しうるシステムを安定化すること、そしてこのシステムが機能することに信頼を寄せること、これが問題なのである。このようにしてはじめて、意味と世界を構成する超越論的な過程は、より高度の複雑性の段階において実現されるのである。(ルーマン『信頼』第三章、pp. 36-37、括弧内補足は訳者、但し、下線および、改行を示す印／、独語補足は高橋、Flexibles Taschenbuch, S. 22)

高次の複雑性 Komplexität を光、低次の複雑性を盲目として、より高次の複雑性への視力のレベルアップを志向する。ルーマンは、プラトンの「洞窟の比喻」の図式を踏襲しつつも、[真と偽]、[本質と現象]といった形而上学的な二項対立や、19世紀のカーライルに顕著な[現実忌避／アイデア希求]としてではなく、洞窟の闇への呪縛すなわち盲目状態を徐々に高度な複雑性へと引き上げること、そのことに盲目状態の相対的な治癒、すなわち世界という危険な複雑性に対応しうるという意味での開眼への漸進を評価する。プラトンのミュトス（寓話）に示唆されている超越的なアイデアという閃光への開眼は、ルーマンのビジョンにおいては、より大きな複雑性への開への進化として要請されているのである。

光と闇の位置関係を反転させ、複雑性の極大を、本質世界の認識をあらわす燦然たるアイデアの太陽光とみなすならば、微々たる複雑性の断片に甘受して生きている私たちは、プラトンの「洞窟の比喻」の囚人たちと同様、暗い洞窟に幽閉されているみじめな囚人たちである。貧相な複雑性に呪縛されているその悲惨な囚人的な単純性の蒙昧に、「より高度の複雑性の段階」へと導くシステム設計という光がもたらされる。フッサールの現象学の transzendental 超越論的な試みを踏襲した、ルーマンにおける「洞窟の比喻」のアイデアや太陽が、それである。複雑性という言葉に置き換えてはおり、またプラトンの形而上学には距離をとりながらも、結局のところルーマンもまた「洞窟の比喻」（『国家』第七巻）の名高い図式によって、世界との根源的な関係を考えている、といわざるをえない。

もちろん、ルーマンの場合、世界は不可知で不確定であり、影絵乱れるその暗冥なる洞窟に囚われている盲目の囚人に最終的開眼があるわけではない。無限の複雑性（世界）への、可能なかぎりでの漸近行為のみが、「回首」（夏目漱石の漢詩79「無題（円覚曾参棒喝禅） 明治四十三年九月二十二日」第4句「回首九原月在天」、『漱石全集第十八巻』岩波書店、1995、p.28、下線は高橋）する勇気ある囚人にとっての、アイデア的な光に対応するにすぎない。だが、その膝でにじり寄る程度の微々たる漸近行為でさえも、複雑性の昂進は、個人にとっても社会にとってもいのちに関わる極めて危険な冒険であり、ほとんど暴挙となる。複雑性をより高めて世界の方へとにじり寄る者は、複雑性の極致である世界という危険きわまりない闇の閃光を、わずかでも直視したことにより、そのあまりの暗黒性に恐怖し、絶望のあまり心と眼を破壊され失

明する。逆イデアの閃光であるメドゥーサの闇の黒い眼光に破滅するのである。それゆえ、そうした精神の崩壊と失明を極力さけるためには、外部の複雑性を増大させていく漸近的操作と同時に、高められた複雑性のもちこむ危険性を絶妙に縮減する防御的操作もまた行われなければならない。深海に潜航する者は、その異常に高い水圧に耐えうる防御機器を開発し、それに庇護されなければならない。太陽の閃光であれ闇の黒い閃光（メドゥーサの眼光）であれ、視力の開もまた、その開に耐えうるだけの閉すなわち視力防御装置を装備していなければならない。ルーマンでは、その防御装置は、複雑性のより強固な縮減という閉への進化としてあらわれる。複雑性の昂進と、複雑性の縮減という相反する二重操作の同時的達成、それが、ルーマンがその過激な思索において探求したメカニズムであり、社会システム、そしてその社会システム理論なのである。

本論考は、ルーマンのそのシステム論を考察するものである。しかしながら、ルーマンのシステム論としてはかなり自由な書法をあえて採用している。論考の中心部分となる後半「その2」では、『社会システム理論』第二章、第三章から多くの箇所を引用し、その解説を行うことに比重をおいていくのに対して、それへの導入となる前半部分なす本論「その1」では、逆に引用は少なめに、ルーマンの考え方を筆者が自身の言葉で語りなおす方式をとっている。これは、ルーマンのようなわけのわからない難解な思想家の場合、彼自身の案出した特殊な用語（テルミノロジー）をそのまま蒸し返すのではなく、一旦そのループ（堂々巡り）の外に出て、よりかみくだいた言葉で全体を見晴らすように語ることが不可欠だからである。カフカを語るのにカフカの言葉で語ってはならない、ベンヤミンを語るのにベンヤミンの言葉で語ってはならない。それは、畢竟、彼らの支離滅裂という見た目を従順に反復するだけとなるからである。カフカやベンヤミンの外に出て、外なる言葉で語られなければ、彼らの難解で秘儀的な表現をただ反復するループの罠にとりこまれることに終わるからである。

ルーマンにおいてもそれは同様である。例えば、おそらくルーマンの社会システム論にとって最も重要であると思える奇妙な概念、「ダブル・コンティンジェンシー（二重不確定性）」について腑に落ちる説明をしているものは、筆者がルーマン考察の新参者であるせいなのか、残念ながらひとつも見ることがない。もしかすると、あえて使用する必然性すらなかったのかもしれないそのパーソンズ直伝の特殊表現に、ルーマンは一体なぜあれほどにまで執拗にこだわったのか（cf.「裏返せば、一般的には、意味の不確定性が解消されないと、行為できなかつたり、コミュニケーションが接続しなかつたりするわけではない。」佐藤俊樹『意味とシステム：ルーマンをめぐる理論社会学的探求』勁草書房、2010、p.152、「二重の不確定性が解消されなくてもコミュニケーションは成立すると考えるしかない。」同、p.155）。「ダブル・コンティンジェンシー」という術語によって何が表現され、そして実は何が隠されたのか、どのルーマン論をひもといてみても、仰々しい隠語があれこれと並べられるばかりで、肝心のその謎の内実については少しも判然としないのである。それは、ルーマンの狙いどおり、ルーマン・ループには

まりこんでしまったことによって、ルーマン思考の要所がはずされてしまっているためである。

もちろん、ルーマンの諸著間の整合性や展開、思索モデルと現実との比較等を初めとして、ルーマン研究への貴重な貢献がなされ、それぞれのルーマン論には一定の学問的有効性のあることは高く評価しうるとしても、ルーマンの表現をそのままルーマン的に解説したところで、所詮ルーマン隠語内ループをこえることはむずかしい。上に挙げた「ダブル・コンティンジェンシー」の例がそうであったように、ルーマン研究はその核心部分においては未踏のようにみえるのである。

後述されるルーマン初期の著作『信頼』(1973)では、システム形成、リスクの安全化を謀る主要な手管として三つが列挙されている。①外から内へのシフト、②学習の学習、③シンボルの一般化という三つの操作がそれである (cf.本論「9. 根拠なきを学び、広げよ」)。その第二の手管である②学習の学習は、システムというものの存立根拠を疑わずに鵜呑みにし、根拠を決して究明しない方法を学習することの学習と説明されているものである。

本論考では、ルーマン隠語への帰依をそのような②学習の学習とする道はとらず、ルーマンを、不可視の世界や破局との関係や力学の中で考えようと試みるものである。なるほどその世界なるものは、私たちには見えず、また意味世界をめぐるせて引きこもるシステムの本性上、それ以外の世界が存在するはずはない。ところが、そのように考え、ぶじ引きこもりえたと思いいこんでいるその立派なシステムに、ある時、存在しないはずのその世界から巨大地震や大津波に類する破局が襲来し、システムのピーダーマイヤー的至福は瞬時にして蹂躪される。システムは、つまり、外の世界を排除し、それを存在しないと一応は確定しながらも、しかし、実は、眠れる猫か犬の敏感な耳のように、システムの彼方の見えない存在しないはずの領域へと、レーダーを鋭くびくびくとはっている。脆弱であるがゆえに尊大であらんとする人間たちのシステムは、そのような矛盾したものとしてのみ自己を際どく存立させ、防御しているひどく屈折したものなのである。

ところが、ルーマンやそのシステム論を、むりやり背伸びして世界に対峙しようとしている、そのような屈折したいじましいものとして見ていく時、不可視の闇(世界)へと絶えず測深波を送り、その緊張下で社会というものを考えようとするルーマンの感性与姿勢は、人間社会の存立条件を、ルーマン同様に危険かつ不可視な暗黒世界(「現実の絶対主義」等)との際どい関係からこそ究明しようとした同時代、同世代の思索の巨人たちと連環する思索として浮かびあがってくることになる。ルーマンを、南はスイスの劇作家デュレンマットと、北はドイツの思想家ブルーメンベルクの峻厳なビジョンとつなげ、彼らがつくりだす暗黒三連星のうちにルーマンのシステム論の方法論を配置する時、その独自性ととも、その厳しい限界もまたくっきりと浮かびあがってくるのである。

ルーマンの社会システム論が最も集中的に論じられているものは、いうまでもなく、その名もずばり社会システムの名が冠せられていた1984年の『社会システム——一般理論の概要』で

ある (Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie, suhrkamp taschenbuch wissenschaft 666, 1987、以下原著からの引用の典拠は stw と略記する。その邦訳名は、邦訳『社会システム理論』佐藤勉監訳、2007に依拠し、以下『社会システム理論』とする)。そして、その浩瀚な『社会システム理論』のいわば精髓や心臓部分ともいうべきところが、第二章の意味論と、第三章のダブル・コンティンジェンシー (二重不確定性) 論の二章である。しかしながら、この著作は、特異なことに、後になってようやく定義されうることが前提となって最初の論証が形成されていくといった後先が転倒した、いわゆる循環論法に特徴があり、その一見周到な論理性はつまるところ、継起的な論理では論証しえない非論理性によって保証されているものである。だが、そうした循環論法といういわばトリック的アクロバットのみがつくりださうな奇妙に高い緊張度によって初めて、『社会システム理論』という、全体的なシステム理論、すなわち普遍的な一般理論の概要を構築し俯瞰するという偉業がなされているともいえる。強引としかいいようのない、非論理性を論理性にみせかける詐術もいとわぬ緊張力高いアクロバットの論理技芸が、本来はなしえない飛躍的連結ともいえるべき架橋を可能にしているからでもある。

ルーマン本人はいうまでもなく、その読者たちにももちろんのこと、そのような裏事情はできれば知られてはならない一種の秘密の瞞着ではあるが、しかし、むしろそうした瞞着によって、これまで未踏であり未明であったシステム本体内部の装置の解明という、画期が達成されたことの方が重要である。先にふれたドイツの思想家ブルーメンベルクは、その『隠喩学のためのパラダイム』(Paradigmen zu einer Metaphorologie, 1960, stw 1301, 1999, S.23f.) の中で、根拠のない根拠、すなわち根拠設定の必然性をいつしかきれいに帳消しにしてくれる魔法のような瞞着・詐術を、「絶対的隠喩」と命名したが、我々がルーマンにおいても、そのようないかがわしい、しかしながら極めて豊穡なる瞞着が、ルーマンの絶対的隠喩によって起動され支えられているのである。

意味システムは、むしろのこと、個々人であるいわゆる心理システムのみならず、そのような個々の心理システム (個々人) が数多く集合する場合、すなわち社会においても、その社会システムなるものを瞞着的に起動せう問答無用の特異点がいつのまにか設定され、根拠なきままに、そしてその根拠なきという事実は隠蔽されて、社会システムが動きはじめるのである。

そもそも、体験や体験的観察のみが群生する、世界との鬱蒼たる境域近くにあって、唯一可能なるものは、観察者が観察者を観察する観察者となる観察迷宮でしかない。そこから、より広い眺望を可能ならしめる理解へといたる道はありえない。だが、システム理論をシステム理論たらしめている理解 Verstehen は、そうした観察迷宮をこえ、その泥沼から離脱しえたシステムのビジョン (眺望) によって、つまり非論理による根拠なき飛躍によってようやく特殊的に獲得されたものでしかない。絶対的隠喩が詐術的に暗躍した結果、奇蹟的に得られたピスタ (通景) でしかない。ルーマンにとってのそうした絶対的隠喩、それが『社会システム理論』

第三章に論じられている「ダブル・コンティンジェンシー（二重不確定性）」である。それゆえ、その強引無比の絶対的隠喩の魔法に、疑いや陰りがあらわれる時、その絶対的隠喩に基づいて築き上げた社会システムというルーマンの摩天楼の垂直的栄光は瓦解し、元の木阿弥の観察迷宮という嘆きの谷間へと無惨にも転落、崩落することになる。

本論では、ルーマンの絶対的隠喩によるそうした栄枯盛衰が論じられる「その2」への導入として、ルーマンのシステムやリスクについての基本的な見晴らしが語られる。

4. リスク社会

ルーマンのシステム論およびリスク論の要諦は、複雑性の増大と縮減にある。けれども複雑性の増大が苦心の末得られたとしても、それに対応する安全装置すなわち縮減のためのさまざまな手管によって（例えば、信頼もそのひとつとされている）、危険きわまりない複雑性が本来に安全なレベルにまで縮減されているのかどうかについて、どこかに確証があるわけではない。同じように実体のないサブプライム・ローンなるものの危険性や欺瞞性を、人々に対して狡猾に隠蔽する金融工学の技術がすぐれていたことと、現実にはそのサブプライム・ローンによって世界的な大金融危機（リーマン・ショック）が誘発され壊滅的打撃をもたらしたことが、別の話であったように、破局すりかえ手管の多彩な案出が、実際に破局を避雷針のようにうまくそらしてくれる、先送りしてくれるかは、これまたまったく別の話ではある。どのように破局を隠蔽し先送りしようとも、破局は依然破局であり、それが忽然と襲いかかることには変わりがないからである。

人類社会、あるいはその諸社会システムもまた、同じ呪いにかけている。社会は、太古におけるそのはじまり以来、つねにその破滅の危険を内包し、隠蔽し、危険を先送りにしてきた。そのように根拠なきままに産出され、いつのまにか駆動している諸社会システムに対して、自然や世界は、それこそ暴君のように容赦なくふるまい、先送りされているかにみえる危険も結局は残酷に降り注ぎ、人間のシステムをそれこそ数限りなく破滅させてきた。「人間的な、あまりにも人間的な」社会システム一般（全体社会）が今なお存立しえているのは、テクノロジーの発展だけではなく、自然や世界がこの数万年間たまたま寛容であったからというにすぎない。「新ネットワーク思考」（パラバシ）が警告する非平衡系次元からの変事襲来の可能性に加え、人類自身がいとも簡単に犯す膨大な人為的ミスをも含めると、いつどこで何がどのように起きようとも、何ら不思議なことではないのである（cf. Charles Perrow, *Normal accidents. Living with high-risk technologies*, Princeton University Press, 1999. ジョン・F・ロス『リスクセンス——身の回りの危険にどう対処するか』佐光紀子訳、集英社新書、2001、第九章）。

それならば、つまるところカーライルがフランス革命に迫真の筆致で描きだしたディオニュソスの破壊の黒いうねりによる怒濤のような席卷だけがこの世界にはあり、この世界に生きる

人類やその社会システムにとって、そもそも、そして希望などありえないのだろうか。

それでも、私たち人間たちの小世界が世界・自然による不確定性の中に投げだされ、膨大なリスクと破局への恐怖の中で喘ぎつづけてきたとはいえ、総体としてはけなげに、驚くほどしぶとく存立し続けてきたこともまた事実ではある。ドイツの思想家ブルーメンベルクの重要な神話論『神話づくり』(1979)によれば、徹底して無力な現生人類は、圧倒的に脅迫する現実世界(それをブルーメンベルクは「現実の絶対主義」Absolutismus der Wirklichkeitと呼んでいる。邦訳では「現実による絶対支配」)に対して、隠喩やその拡大版である神話という虚構の藪にくるまることによって、距離・隔たりをとり、自己保存とサバイバルを行ってきた(Arbeit am Mythos, dritte erneut durchgesehene Auflage, 1984, Suhrkamp, S.9ff., 邦訳『神話の変奏』青木隆嘉訳、叢書・ウニベルシタス955、法政大学出版局、2011)。そうした危機的な様態そのものと、それへの対処の仕方の構図それ自体は、科学の進歩した現代においても、神話を次々と創りだしていった太古の時代と基本的にはそう変わっているわけではない。むしろ、地球環境破壊や人口爆発、原子力発電所の事故等の危険によって、人類のおかれている状況は今やよりいっそう悪化している、と考えるべきかもしれない。現代社会の未来は、途轍もないリスク群を抜きにして考えることはもはやできないからである。

ところで、こうしたリスクに満ちた社会は、一般に「リスク社会」と呼ばれているが、そうした現代社会への変化を1980年代に予言的に考察した代表的な思想家が、ドイツの二人の著名な社会学者、『危険社会——新しい近代への道』Risikogesellschaft. Auf dem Weg in eine andere Moderne (Edition Suhrkamp, 1986、邦訳：東廉、伊藤美登里訳、法政大学出版局、2006)等をあらわしたウルリヒ・ベック Ulrich Beck (1944-)と、『社会システム理論』(1984)や『リスクの社会学』(1991)を初めとする膨大な著作によって社会システムの存立条件を、不確定性やリスクのあり方から究明しようとしたニクラス・ルーマン Niklas Luhmann である。ベックやルーマンたちに対する賛否に関わらず、リスクに関する研究は、文献的にも必ずやこの二人のリスク論に逢着する。

一般的な広がりや認知、影響力という点では、チェルノブイリの原発事故の直前に刊行され、リスクの遍在と危険社会、正確には破局社会の到来を鋭く予見し、今や社会学のみならずその他の諸分野においてもさかんに引用されるベックに軍配があがるかにみえる。しかしながら、危険社会、より正確には破局社会への突入を警告しつつも、極度に個人化し分裂しゆく新しい市民社会の在り方に、逆に将来の変革への希望を託しているベックが、ある意味楽天的な印象を与えるのに対して、ルーマンの社会に対する考察は、本論「その1」の「3. 洞窟の比喩」に紹介されている複雑性の縮減云々の内容からだけでも容易に推察しうるように、未来社会のみが危険なレベルにあるというだけではなく、そもそも現在の社会の存立そのものが極めて不確定で脆弱なものである、と考える一種絶望的なものであり、世界や社会についてのルーマンの思索は、その絶望の度合いに照応して、ベックに比しはるかに難解かつ峻厳である。難解で

あるのは、ルーマンの社会理論が、破滅・破局の自明性に依拠してシステムという確実性を捻出す逆説的なシステム論やリスク論を展開しているからというだけではなく、もうひとつ破局の自明性という恐怖をもよおさせる事実、すなわちリスク社会破局の可能性を、人々とルーマン自身とに強く隠しながらも、しかし、その恐怖によってこそ語らざるをえない非常な矛盾や屈折した思考の道筋を強いられているからでもある。

現代、企業等で大いに注目されている「リスク・コミュニケーション」のような、ある一定のリスク現象に対する即応的、実用的、ある意味対症療法的なやり方に関する考察とは異なり（橘木俊詔編『リスク社会を生きる』岩波書店、2007、第1章。橘木俊詔他編『リスク学入門1-5』岩波書店、2007）、フッサールやヘーゲル等の思弁的なドイツ哲学の素養を豊かに身につけた理論社会学者ルーマンは、社会が本来リスクや破局に浸され、それに対抗するように誕生した極めてあやういものであるにもかかわらず、ある種の安定的な浮遊的存立を社会に可能ならしめているのはなぜなのか、何なのか、破局の数限りない侵入に対して社会という装置は、どのような防衛的対処作戦を行っているのか、その隠されている複雑なメカニズムを、原理的に、ある意味思弁的に考察しようとする。

それゆえ、ルーマンの思索は、具体的な諸リスクや、それらを解消するための明快な答えには距離をとり、むしろ大きく迂回に迂回を重ねて、世界とリスクとの関わりを俯瞰的に考えていこうとする。全体的な俯瞰の著しく困難な、また原理的にもそれが強く否定されている現代にあって、ルーマンはあえて、社会という総体を形成させ持続させている隠された諸原理を、俯瞰的、全体的に探求しようとするのである。そうしたヘーゲル的な全体鳥瞰への不屈の意志と怪物的な創作力からは、辟易したくなるほど大部の著作が夥しく生み出されたが、それらにおいて繰り広げられているルーマンの刺戟に満ちた思索の数々は、今日、世界と社会との関わりを原理的、メタ的に（俯瞰的に）考究しようとする際、避けることのできない重要な里程碑となっている。

その中ではっきりとリスクを論じた著作は、ルーマンのリスク論といえば挙げられる『リスクの社会学』（1991）である。もっとも、以前の諸著においても、例えば（1968、）1973年に刊行された『信頼』等でも、「不可避なリスク」を引きうける形式が多彩に考察されており、ルーマンの思索は、直接にであれ間接にであれ、またそれを可視化するのであれ隠蔽するのであれ、常に深い意味でのリスクをめぐるなされていると考えてよい。

一般のリスク論に対するそのルーマンによる大きな貢献のひとつともいえるべきものは、1991年刊行のその『リスクの社会学』（Niklas Luhmann, Soziologie des Risikos, Walter de Gruyter, 2003）で明示された、安全やリスクに関する見方や図式の根底的な変更であろう（図3、図4）。それまでリスクといえば、確率論的次元でのことにすぎず、そのためそこでは安全 Sicherheit かリスク Risiko かの判定こそが問題であり、その延長線上に誕生し浸透していったいわゆるリスク論、リスク研究も、伝統的な [安全／リスク] Sicherheit/Risiko という二項対

立概念を基本とするものであった (Soziologie des Risikos, S.28ff. 以後同書は SR と略記する)。

しかしながら、科学やテクノロジーの劇的な発達と展開に伴い、20世紀後半、特にその終わり頃からリスクへの強い意識が急速に高まっていく。「人は知れば知るほど、自分が何を知らないかを知りようになり、そのことでますますリスクへの意識が強められていく。」(SR, S.37) 好奇心という知の罣が作動していくのである。

現代のリスク社会は、諸テクノロジー実現の結果を認知したことの帰結であるというだけでなく、探求の可能性および知そのものの強化のうちにもまた、すでに胚胎されていたものなのである。(SR, S.37f.、下線は高橋)

それに伴い、リスク概念そのものにも変質がおきる。リスクに対置されていた安全概念そのものが、発展し流動性を高めていく現代社会の中で大きくゆらぎ、安全性すなわち確実に安全と思える領域を設定することが極めてむずかしいものとなったためでもある。リスクがあまねく遍在する。そうした不気味な可能性と事実の到来を暴露かつ予告してみせたウルリヒ・ベックの『危険社会』(1986)の登場と、社会におけるこの書への大きな反響は、そうした時代の変化をはっきりとあらわすものである。従来の常識であった [安全／リスク] Sicherheit/Risiko という対立図式は、今やそのリアリティを失ったのである (土方透、アルミン・ナセヒ編著『リスク：制御のパラドックス』新泉社、2005、序、第1章、第6章、第8章、小松丈晃『リスク論のルーマン』勁草書房、2003、序論、第1章、小島剛『科学技術とリスクの社会学』お茶の水書房、2007、第1部第1章、三上剛史『社会の思考——リスクと監視の個人化』学文社、2010、第3章)。

5. リスク／危険／破局

それにかわる新しい対立概念としてルーマンが提示したのが、不確定性の度をより高め、観察次元における差異をからめた [リスク／危険] Risiko/Gefahr (英語では risk/danger) という新区分である。どこかに安全があるのではなく、人間たちにもどうにか馴致可能かもしれない計算可能なリスク (これが、ともあれ暫定的に人に恵与された“安全”ということになる) と、人間には制御不能な危険との対比のみがあるとする区分が、それである (SR, S. 29ff., S.37f., S.40)。(図3)

リスクと危険という区別は、未来の損害に関しては不確かさが存在するということを前提にしている。(そして、そのことによって、他の区別とは一線を画することになる。)そ

の場合、二つの可能性が存在する。①ひとつは、もしかすると生じる損害が、ある決断の結果と見なされる、つまり決断が帰責されるもので、この場合はリスク、それも決断のリスクと私たちは呼ぶ。②もうひとつは、もしかして生じるその損害が外的に引き起こされたとみなされる場合、すなわち環境 Umwelt に帰責されるもので、その場合私たちは危険 Gefahrと呼ぶ。(SR, S.30f、イタリック・傍点は原文、①②の付記、独語補足、下線は高橋)

企業の不祥事対策のみならず、環境や人権等とのからみから、現在、諸領域へと急速に広がりつつある「リスク・コミュニケーション」や、防災対策等を具体的に考えるリスク研究分野においても、こうしたルーマンによる区分はもはや突飛なものではなく、むしろ基本的な概念や認識として広く認知され、社会一般の中に浸透しつつあるようである (cf. 吉川筆子「第6章 リスク・コミュニケーション」、『リスク学入門4 社会生活からみたリスク』今田高俊責任編集、岩波書店、2007。山下祐介『シリーズ 災害と社会6 リスク・コミュニティ論 [環境社会史序説]』弘文堂、2008等)。

図3



リスク Risiko とは、ルーマンによれば、特定の人間や組織の決断に責任を帰すこと（帰責）のできる、将来生じうる損害や被害のことで、それゆえ当然のこと、人間によって処理や対応の可能なものである。それに対して、危険 Gefahr は、「自己の決断には帰責しえない」将来の損害をいう (SR, S.38、下線は高橋)。地震や大津波等のような天災は、原則として後者の危険の方に分類される。“想定外”の計算不能、特定不能な災厄であるからである。しかしながら、それらの損害がリスクであるか危険であるかは、実は最初から決まっているわけではない。

リスクは危険であり、危険はリスクである。同一の事象であっても、それは左右二項間に差異を要請するある区別によって観察されるならば、同一なるものは異なるものだからである。(SR, S.117)

ということは、いいかえれば、人にとってすべては処理と帰責の可能なリスクという考え方

ありうるということである。

原理的には、どのような損害であれ、決断によって回避することができる。それゆえ、その損害をリスクとして帰責することができる。(SR, S.36、下線は高橋)

処理可能なリスクのみがある。だが、そのリスクによってリスクが発生する。

「リスク／安全」と「リスク／危険」という二つの区分に妥当するのは、「リスクから自由な態度といえるものは存在しない」ということである。「リスク／安全」図式にとってこれは「絶対的な安全なるものはない」ということをし、また「リスク／危険」図式にとって「そもそも決断がなされたなら、リスクを回避することはできない」ということを意味している。(SR, S.37、イタリック・傍点は原文、下線は高橋)

デュレンマットの戯曲や著作中の人物たちのように、人は、リスクを回避しようと決断・選択すればするほど、それだけいっそう深くリスクのパラドックスという泥沼に巻き込まれていく (Friedrich Dürrenmatt, Die Physiker: eine Komödie in zwei Akten, Arche, 1962. 『物理学者たち』)。襲いかかるリスクに対応する戦略がないではない。『リスクの社会学』では、例えば「リスク分散戦略」Risikoverteilungsstrategie (SR, S.39) が挙げられているが、しかし、その巧妙な未来とて必ずしも薔薇色といえるものではない。

最初に生じる決断時最初のリスク Erstrisiko も、第2のリスクによって緩和され、補足され、弱められるのである。しかしながら、その第2のリスクにしても、つまるところはリスクのひとつではあるので、場合によっては最初のリスクが強められてしまうこともないではない。(…)あるいは、それがたんに元気づけの虚構としてのみ有益であったということもある。リスクを分散するためのリスクは依然としてリスクであることには変わりがないのである。(SR, S.39、独語補足、下線は高橋)

信頼性のない債権を証券化し、1を100にも増幅させうる金融工学の狡猾な梃子(リバレッジ)によって、その内包する危険性を多様に分散かつ拡散させた米国発サブプライム・ローンは、そのようなリスク分散戦略の典型的なものといってもよいものである。だが、その分散戦略が、結局、世界的な大金融危機(2008)を招いたことはいうまでもない。リスクは消失することはない、しっかりと回帰するのである。ルーマンのリスクや危険の概念、「リスク／危険」図式も、リスク分散装置すなわち隠蔽装置として作動する限りは、そのサブプライム・ローンと同じ危うさを内包せざるをえない。いかに人間的に優しく変形されたリスクの地に逃れようと、破

局は必ずやってくるのである。

もちろん、その破局を一応、人間的なリスク計算の側に強引に引き寄せ、政治的判断に左右されるといった類の表現によって、破局にも優しい人間的相貌が与えられてはいる。

同じ問題が、あるケースでは破局とされ、別なケースでは破局とはされないため、さらにまた数量的分析といってもあれこれ操作が可能であることも一般には知られているため、計算によってはほとんど人を説得することはできないであろう。数量的計算という方法が選択されたというだけで、その方法に毎度お決まりの側面への選択がすでにそこには含まれていることになるからである。事実、数量的分析は、破局が危惧されねばならないところでは必ず、その重要性を失う。(さらに)破局とされるものそれ自体も、具体的な諸基準を根拠にして確定されているわけではない。ある個人にとっては、運転免許証が剥奪されただけでも破局かもしれないし、麻薬入手の道が断たれたただけでも破局であるのかもしれない。それゆえ、(破局では数量的分析は不能、数量的分析の不能なるものが破局、といった)循環論法に陥る危険を冒すはめにはなるが、被害者たちを数量的分析で説得することができないケースを、私たちは破局とよぶことにしよう。(SR, S.159、括弧内補足、下線は高橋)

この箇所に基づき、小松は、破局を「恐怖のシナリオ」から引き離す。

ルーマンは、ある種の決定に関与できない被影響者を、数量的なリスク計算によって説得させるこ／とができなくなるとき、そこにカタストロフィが成立すると述べている (SR: 159)。つまりルーマンにとってカタストロフィ Katastrophe とは、単にある種の恐怖のシナリオを意味する概念なのではなく、科学的知識に基づいてどの点を明らかにすればリスク軽減が可能かといった非知 Nichtwissen の特定化が不可能である、という人々の意味づけを言い表した概念である。(小松、pp.73-74、但し独語補足、下線、改頁の印／は高橋)

しかしながら、「リスク軽減」、「非知の特定化」等といった微温的な気配漂う姿勢も、人間の遊戯場内でのリスク計算という範疇を大きく越えた東日本大震災に見舞われた後では、破壊の絶対王者である破局の「恐怖のシナリオ」に、人は隷従することを余儀なくされる。人は今やその不可知、不可測の恐怖をこそすべての規準としなければならない。すると、リスク／危険／破局は、次のような関係にあることが判明する。

- 1) リスク Risiko は、人の処理の射程範囲内にあり、それゆえ誰かの決断に帰責可能なものである。(危険 1)

- 2) 危険 Gefahr は、例えば、天災のように誰かに帰責しうる範囲を超えうると同時に、処理・帰責可能なリスクへと変節しうる両義性を帯びている。（危険 2）
- 3) 破局 Katastrophe は、その二者に対して、それらの射程距離を大きく超え、処理・帰責の全く不可能なものである。人智、人力では太刀打ちのしようがない壊滅的な破壊現象で、その予測不能性、対応不能性のゆえに想定外とされ、逆に軽視され、意識から排除されるものの、確実に到来し人を絶対的に支配しているものである。（危険 3）

帰責不能という点で、危険 2（危険）は、危険 3（破局）から派生しているが、破局ほどの凄まじさはなく、いわば毒抜きされたそのミニチュア版とでもいえるものである（図 4）。しかし、帰責や対応が可能という意味では、その度合いにはかなりの違いがあるものの、危険 1（リスク）と危険 2（危険）とは連続するものである。したがって、危険性からその三者を見ていくなれば、破局（危険 3）を起点として、まずは危険（危険 2）がその希釈版として派生し、続いてその危険 2 からは、その毒性を極度に希釈したバージョン（版）としての危険 1（リスク）がさらに派生的に発生している、と考えることができる。三者は、異なる対立するものではなく、淵源を同じくするひと繋がりのものであり、順々に発生する派生的な関係にあると解することができる。そうした嫌な関係を曖昧化する覆いを取りのぞいて、新図式「リスク／危険」を素のままで提示してみると、私たちがそこにまのあたりにするのは「リスク／破局」であり、より柔軟には「リスク／危険／破局」とでもいうべき関係図である（cf. 図 6）。

図 4

	基本特徴	新図式	旧図式
安全	安全	—	安全
危険 1	計算・対応可能ゆえ、まま安全	リスク	リスク
危険 2	対応困難・不分明・帰責不能	危険	リスク
危険 3	不可知、不可測、壊滅的打撃	破局	リスク

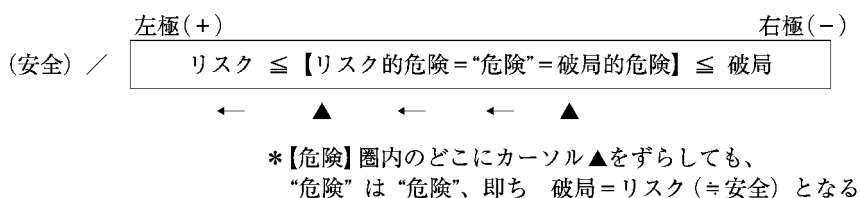
6. 危険 Gefahr の両義性

その三者の連続性がどのように作りだされ、そこからどのような帰結が導きだされていくのか、そのメカニズムをもう少し詳しく覗いてみよう。

破局を起点に見晴らすことによる驚くべき発見は、2) 危険の両義性である。危険は、ある時は 1) リスクに、ある時は 3) 破局に変わりうる。リスクとしては危険にすぎ、破局としてはあまりにも微温的にすぎるともいえる。しかしながら、この 2) 危険の曖昧な両義性こそは、3) 破局を隠蔽するに最高のアイテムである。

そのことは、リスク、危険、破局の三者を横一直線に並べてみるとよくわかる(図5)。左の安全軸側に配置されているリスクは、リスクとして確定しているわけではなく、時に危険と区別することのむずかしいものである。帰責があるようでいて、しかしまた、ないようでもある両義的な危険 Gefahr は、帰責可能なものとしてリスクに、だが、帰責不能ないしは曖昧なものとして破局に近似する。危険の帰責不能らしい側面を、少しだけ推し進めてみると、その先に姿を見せるのは、当然のこと、帰責の全き不能、論議の不能、不可測である恐怖の破局そのものである。帰責計算になぜか難渋する気味のあった危険概念の外部には、帰責のまったく効かない、災いの大元となる世界という名の破局が無辺際に広がっている。

図5

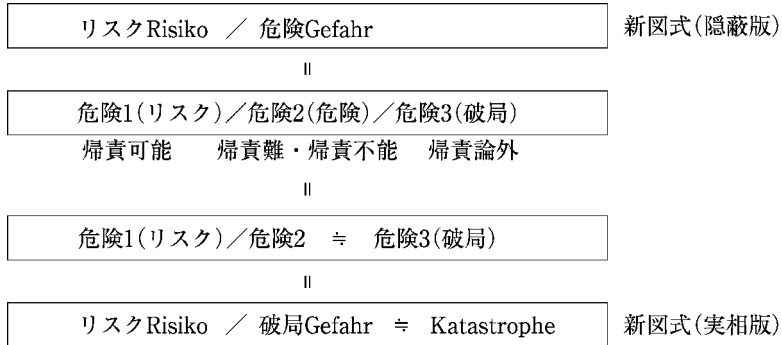


その帰責可能なリスクを危険1としてみると、帰責が曖昧で、むしろ帰責不能に近い危険 Gefahr が危険2、どのようにしても帰責の不可能な実相である破局が危険3、すなわち真正の危険、危険の正体ということになる(図4)。危険性はまず「危険2(危険)/危険3(破局)」に分節され、その後に危険2(危険)が「危険1/危険2」へとさらに分節される。その時、前者の危険1がリスク、後者の危険2が危険 Gefahr と命名されるが、それと同時に危険3(破局)は切り離され、忘却される。危険 Gefahr が曖昧で両義的であったことによって、[リスク/危険/破局]の三者が同一線上で連続し、破局は危険とも、危険はリスクともなりうるものとなる。その両義的な危険 Gefahr の横に細長いスペクトル圏内で、カーソル▲を右極の破局から左極のリスクの側へと、必要に応じて適宜、牽強付会的にスライドさせることによって、危険や破局が人間的処理の可能な安全なリスクに姿を変える。

つまり、脅威的な破局 Katastrophe であっても、両義的であるがゆえにほとんど万能となったその危険 Gefahr に肩代わりしてもらうならば、その魔法のスライドによって破局の呪いを祓い、それを雲散霧消させる慶事も可能となる。破局の帰責不能を人間的計算の可能な明るいリスクへ、リスクに極力近いリスク的危険へと相貌を一変させる。今や、破局も人間の手によって安全なリスクへとすり替えていくことができるようになったのである。この凱歌は、世界的金融危機(リーマン・ショック)の原因となったいんちき金融工学の手法そのままである。

しかしながら、その楽しい連続性は、恐怖の世界劇場の幕開けでもある。「絶対的な安全というものはない」とルーマンは『リスクの社会学』の中で断言したが、それに応じたはずの新図

図 6



式「リスク／危険」の危機意識やそれを回避するトリックも、連続性図式の淵源である破局という戦慄的な世界劇場の掌の上では、所詮、毒抜きされた遊戯にすぎないものである。逆にいえば、それらの連続性を示す横のラインを導火線のようにして、破局が日常にいつ何どき襲来するやもしれない。ルーマンが「リスク／危険」という時、それはすなわち「リスク／破局」であり、危険とは実は破局のことであったのである（図6）。

7. 第二次オーダーへの回首

危険はリスクともなり破局ともなり、リスクの方も危険になりうる。前者は、恐怖隠蔽のために導入されたトリック（[リスク≡危険≡破局]という横軸でのスライドを可能とした等式）の搭載に帰因しているとすれば、後者の関係の方は、観察する観察者の相対性に拠るものである。リスクにおいて、人は選択し、決断することで危機的状況の回避を試みることができる。リスクは、決断に基づいて特定の人物に帰責しうるものである（SR, S.30, 34, 36, 236）。損害の帰責が具体的な誰かになしうる場合がリスク、帰責が明示されえない場合が危険である。つまり、帰責の判定は、誰が何をどのように見るかの観察に依存かつ左右される。ルーマンによると、その観察には次の二種類があるという（SR, S.242. cf. SR, 第12章）。

- ①他者を互いに対象・客体 Objekte として観察する、第一次オーダーの観察者による観察
- ②その観察者たちを、離れたところからいわば俯瞰的に観察する第二次オーダーの観察者による観察

それについてのルーマン自身の説明を、『リスクの社会学』『第二次オーダーの観察』と題された第12章から引用してみよう。

例えば、道路交通でリスクな追い越しをしたら、銃火気をもてあそぶ、といったリスクなふるまいをする者は、それを第一次オーダーの観察者として行っているかもしれないが、しかし、自分はリスクに関わっているのだろうか、と熟考するやいなや、その者は、自己自身を第二次オーダーの観察者のポジションから観察することになる。そして、その時に初めて、人は本来、リスク意識あるいはリスク・コミュニケーションを語ることができる。なぜならば、リスクに典型的な操作上の区別（リスク／危険）が根底に置かれ、その結果として、区分には（リスクならば、危険という対項という）別の側面もあり、単純に対象を報告しているだけではないのだということが同時に考慮されるのは、そうした時でしかないからである。（SR, S.236、括弧内補足、下線は高橋）

①第一次オーダー（秩序）とは、五感を通じて認知した事実 *Fakten* をリアルな実体として観察し行動する人々の、具体的（アナログ的）な次元であるとすれば（「彼らは事実 *Fakten*を信じている。」「第一次オーダーの観察者にとって、これがリアルな世界なのである。」SR, S.30、下線は高橋）、対する②第二次オーダー（秩序）の次元の方は、その①第一次オーダーの次元、すなわち実体次元で観察し判断し行動する観察者たちのレベルからは離れて、その彼らの行動を、そっくり鳥瞰的にないしは俯瞰的に観察する、より抽象的（デジタル的）なレベルのことをいう。ルーマンによれば、リスク社会への移行と平行に現代社会は、第一次オーダーの観察レベルからこの第二次オーダーのそれへと移行しつつあるともいう（SR, S.246f.）。

このオーダーという表現は、一般に体制、秩序、等級を意味するものであるが、中世の修道会や騎士団のことをオーダー *order* と呼ぶように、ルーマンではある階層、階級のことを指すと考えるとわかりやすいかもしれない。五感の認知による実体への信者たちの第一次オーダー（階層）の観察者の観察次元は、身体的五感に支配されている。だが、それだけに、脅威である破局・世界 *Welt* と接し人間的システムが起動する生々しい境域にはより近い位置にいる。その意味で、リアルだが不確かな観察によって判断し行動する第一次オーダー（階層）の観察者たちとは、「洞窟の比喩」の洞窟に幽閉され、ゆらめく影絵の幻影や現象にまどわされている、プラトンのあの盲目の囚人たち、といいかえてもよい。ということは、その大勢に抗して、おのが首を背後の光の方へと大きくねじり回首する者とは、影絵を凝視するだけの囚人たち（第一次オーダーの観察者）に対して、より光明に開眼した階層である第二次オーダーへと踏みいった覚醒者たちのことである。つまり、暗い洞窟の囚人たちを翻弄している不分明な影絵（現象）が第一次オーダー（影絵の階層）、その曖昧で歪んだ壁面の影絵から回首して、洞窟外（光の世界）へと歩み出る覚醒者がまのあたりにするものが第二次オーダー（光の階層）である。イデアの明光（プラトン）と破局的複雑性の闇の光（ルーマン）という極性に決定的な違いはあれ、思考の枠組みは「洞窟の比喩」そのものであり、ルーマンでは、その光と闇に、不確定性への開眼という現代的な変形と装いが一見強くほどこされていたというにすぎない（図7）。

図 7

プラトン 洞窟の比喩（『国家』）			ルーマンの観察次元
洞窟内 壁の影絵 縛られた囚人	現象 盲人	可視の世界 妄想の餌食	第一次オーダー（影絵の階層） 第一次オーダーの観察者
振り返る囚人 洞窟外・出口・光	覚醒者 アイデア	真理の認識 真理	第二次オーダーの観察者 第二次オーダー（光の階層）

さて、ルーマンでは、帰責を確定しうるリスクであるのか、それとも帰責が不明な危険であるのか、損害の帰責判定の判定はその観察によって決まるとされる。ある事態がリスクとなるのか、それとも危険に分類されるのかは、最初から確定されていたわけではない。だが、洞窟の壁面に影絵（五感により観察された対象）しか認識できない五感の実体信者たち、すなわち第一次オーダー（影絵の階層）の観察者たちの目には、確定しうる（と幻想された）明確な事実として全ての事象が、対象が見えている。第一次オーダーの観察者たち（『洞窟の比喩』の囚人）は、「安全／リスク」の安全であれ、「リスク／危険」の具体的に帰責を確定しうるリスクであれ、伝統的な旧図式「安全／リスク」に依然として強く縛られており、壁面に映る影絵から離れて、洞窟の後方に灯る光が開示しうる不可測の危険 Gefahr（複雑性・不確定性）や、その危険の本源である洞窟の外に広がる破局 Katastrophe を、すなわち（闇の）太陽のアイデア的閃光（複雑性の極）を見ることはない。

それに対して、第二次オーダー（光の階層）の観察者の方は、リスク（影絵）と危険（光）との差異も、観察の仕方次第ではそのどちらにも転びうること、そして理不尽な危険や破局は世界のいたる処に遍在、出没しうることを予感している。実体的な事実への信仰の有無のみならず、破局との連続性への開眼の有無に第一次オーダーと第二次オーダーとの決定的な差異が存在する。

とはいえ、それによってより知的でより広い視野をもつ第二次オーダーの観察者たちが、第一次オーダーの観察者たちにはっきりと優りうるわけではない。第二次オーダーの観察者たちもまた、第一次オーダーの観察者たちによって、具体的な対象として第一次オーダー的にのみ観察されており、加えて、その第二次オーダーの観察者たち自身もまた、異なる観察者たちによって同じように第二次オーダーから俯瞰的に、つまり関係性として抽象的に観察されている。第二次オーダーの観察の観察者は、第一次オーダーからも第二次オーダーからも第一次オーダーの対象に貶められ、その限りでは、第二次オーダーの観察者たちであっても依然として第一次オーダーの観察迷宮の虜囚であることには変わりがないのである。

長短24の調性を網羅したバッハの『平均律クラヴィーア曲集』（1722, 1744）に触発されて、劇作家デュレンマットが最晩年に発表した凝集度の高い実験的な中編『依頼 Der Auftrag』に先見的に描かれていた、観察迷宮という底なしの蟻地獄の中に人は囚われている（Friedrich

Dürrenmatt, Der Auftrag oder Vom Beobachten des Beobachters der Beobachter: Novelle in vierundzwanzig Sätzen, Diogenes, 1986、『依頼——あるいは、観察する人々を観察する者の観察について、24の文からなるノヴェレ』)。第二次オーダーから第三次オーダーすなわち形而上的高みへと通じるかつてのような抽象的浮揚の道を断たれ、「第三の審級」（大澤真幸）を喪失した現代人には、畢竟、どのようにあがいてみてもプラトンの「洞窟の比喩」の影絵次元に、すなわち第一次オーダーの五感悪夢に舞いもどされてしまう定めしか与えられていないのである。

そのことは、必ずしも第一次オーダー（階層）が悲惨な劣位にあるということではない。そもそも生命種の一つとして身体的に生きるとは、五感で認知する第一次オーダーでこそ生きるということでもある。生態的に生きる生命種にとり、第一次オーダーこそ最もリアルで心の安まる基底である。その具体的な第一次オーダーと、それら全体を関係性として俯瞰する抽象的な第二次オーダーとの、双方がともに活用されることで、人は生存の荒海を生き延びることができるのである。

だが、すべてが具象的で実体的でわかりやすい第一次オーダーとは逆に、第二次オーダーは抽象的、間接的にすぎて不透明で、観察不能ともなり（SR, S.245）、その不透明に不透明が積み重ねられ複雑に纏れあっていくようになると、観察は、形而上学の空中楼阁同様、生からの乖離と無明にたちいたる（SR, S.246, 「black box」）。それが、第二次オーダーの先に想定される第三次オーダーとでもいうべき超域的俯瞰行為（観察）である。地上からアイデアへの道の模索を行う媒体として書かれていた長編小説にはすでに見切りをつけ、ようやくにして獲得されたアイデア天界の具体的形象に大胆に挑戦していた英国の作家・詩人トマス・ハーディが、その最晩年となる20世紀初頭に発表した大長編劇詩『霸王』The Dynasts (1903-7) には、そうしたアイデア天界が、種々の精霊たちが舞い集える聖なる階層（オーダー）として詳細に、しかし、それとても、人間たちを依然として意味なく弄ぶ盲目の宇宙意志（破壊のディオニュソス）に対する深い絶望に彩られながら描きだされている（トマス・ハーディ『諸王の賦：ナポレオンとの戦いの叙事詩劇』長谷安生訳、成美堂、1979）。

現代において、第三次オーダーとなりうるかもしれない形而上学的世界への志向は失速し、『霸王』の天界も絶望に彩られて、すべては第一次オーダーの原初的混迷、万華鏡なす観察迷宮へと引きもどされていく。第二次オーダーの観察者もまた、母なる第一次オーダーのリアルな実存と混迷へと立ち戻ることを余儀なくされているのである（SR, S.246）。

それは、「洞窟の比喩」に範をとった危険・破局への第二次オーダー的覚醒も、所詮は、第一次オーダー的盲目への再失明化、すなわち開眼の否定という隠蔽操作を不可避的に必要としている、という逆説からでもある。事実また、その逆説にはプラトンの「洞窟の比喩」のさらなる意義深さがあり、回首して覚醒した囚人も、洞窟の外のアイデアの閃光に眼をやられて失明し、恐懼してふたたび暗い洞窟内の影絵に舞いもどる狂言を演じることとなる。意に反して、我知

らず、実相の隠蔽が要請されてくるのである。

「洞窟の比喩」の現代版であるルーマンの第一次、第二次オーダーの観察においても、破局(過剰な複雑性)が放射するあまりにも強烈な(闇の)閃光を浴びて人は恐怖し、その闇のあまりの輝きに耐えきれずに、第一次オーダーの次元(壁面の影絵凝視)へと後戻りする。第二次オーダーの観察によって認識された危険なはずの危険 Gefahr と破局が、危険に天与の両義性により、洞窟の影絵的な第一次オーダーの安心なる観察レベルへと歪曲されていくトリックも、そうしたいじましい狂言のゆえである。

リスクな葛藤はもちろん多々あり、またリスクがリスクを喚ぶ迷宮性も、確かに力説されてはいるものの、危険と、それが内にはらむ破局は巧みに排除され、危険 Gefahr がそれとして容認されるのは、危険 Gefahr が計算可能な、それゆえに“安全”なリスクの極の方へと強く引き寄せられ、その毒性、危険性が大幅に縮減されてから後のことである。危険性の縮減は、原理的にいえば、第二次オーダーの観察にこそ関わる操作であるが、その縮減操作の事実が隠蔽される必然性のうちには、実相観察への恐懼と、第一次オーダーの観察次元へ後退したい強い衝動とが隠されている。「現代社会は危険をリスクの側から見、危険をリスクとしてのみ真剣にとる」(SR, S.36、傍点と下線は高橋)。現代社会に対するこのルーマンによる診断には、社会のそのように屈折した願望と、それに即応した人間的な戦略意志が如実に示されている。

だが、リスクか危険か、帰責は可か不可か云々の議論も、社会システムの外側から、恐ろしい閃光を放つ破局 Katastrophe が突如襲来してきたならば、どうなるのか。

ほかならぬ生態系が介在している損害の場合、ある臨界点の超過、生態系の平衡における不可逆的な変化、あるいは破局の発生といったものは、個々の決断に責任を帰することはまったくもって不可能である。(S.35)

システム構成員たちの第一次オーダーの観察がどうの、第二次オーダーの観察がどうの、帰責しうるリスクか、帰責しえない危険がどうの、決断の有無がどうの、といったシステム内の次元における問題はすべて瞬時にして吹き飛び、すべては破局(世界)という闇の閃光を起点かつ背景として演じられるバロック風世界劇場(カルデロン、デュレンマット)でのマリオネット的瑣事にすぎない、という実相がむきだしとされる。危険 Gefahr の本性や淵源である破局 Katastrophe は、「リスク／危険」の選別以前の太母さながら(「母たち!」ゲーテ『ファウスト第二部』第一幕「暗い廊下」)、絶対に見たくない呪わしいものの極致(メドゥーサの生首)として、人間たちにとって都合のいい人工的な「延長空間」からは巧みに排除されていたにすぎなかったのである。

8. 多重隠蔽の必然性

さて、ルーマンのいうように「絶対的な安全というものはない」く、社会からは安全な地帯が揮発し、安全と見えたものさえいずれも液状化にも似たひどく不安定な、いわばリスクひしめく領域に様変わりしてしまっているとすれば、人はそのさ中で、そうしたリスクを軽減するべく決断し、より安全な方へと舵を切って生きていかなければならない。だが、リスクを回避する決断は、新たなリスクを喚び、決断しないことも一つの決断としてリスクを招き寄せるという。人は、まさしくリスクの迷宮に生きている。

しかしながら、社会の中に住まう人間たちが、そのような新しい二項対立図式(「リスク／危険」)や落ち着かない迷宮状態にすんなりと適応し、そのように日々緊張した生き方に耐えていけるかという、それは大いに疑問といわざるをえない。

というよりも、実態はおそらくその正反対で、人々は、破局や危険はもちろんのこと、今やとりあえずの安全の代名詞となったリスクでさえも、極力見たくもない、含みおきたくさえないものである。リスクや危険、破局といったぞっとしないものが、よしや事実として、私たちの生活世界のどこかに潜在・雌伏し、時には顕在することがありうると指摘かつ証明されたとしても、できるならば、それについては極力考えたくはない、可能な限りは隠蔽したいと考えるものである。

社会学者大澤真幸は、東日本大震災直後の2011年5月に刊行したリスク論講義の「第三講 リスク社会の(二種類の)恐怖」、「1 チャレンジャーの事故に関する集団的否認」の中で、1986年1月に起きた米国宇宙船チャレンジャーの事故の落下時における完璧に無意味な空白の瞬間に対する限りない恐怖の隠蔽、米国民そろっての「集団的な否認」についてのべ、3.11以後の「日本社会は、まさに、あの墜落途上の宇宙船チャレンジャーのようなものである。われわれは皆、間延びしたチャレンジャーに乗っているのだ。」と不気味かつ正確な指摘をしている(大澤真幸『社会は絶えず夢を見ている』朝日出版社、2011、pp.190-197、pp.235-237、p.317)。宇宙船落下時の、意味がきれいに揮発した戦慄的な存在様態は、3.11の衝撃以後の日本の実相を示しているというだけではなく、現代社会の姿そのものを暴露しているものでもある。デュレンマットの短編『トンネル』Der Tunnel (1952)は、そうした列車の無限に意味なき落下と、その戦慄的な異変にもいっこう気づこうともしない乗客たちの姿を、先取りするように描いているものであるが、それは、落下しゆく宇宙船の乗客である私たちにとって、その落下の事実こそは最も知りたくない禍事であったからである。それゆえ、現代社会にとって実相の隠蔽は必須である(Friedrich Dürrenmatt, Werkausgabe Bd. 20, Verlag der Arche, 1980)。

その意味で、ルーマンが理論社会学として考察し、その成り立ちとメカニズムを明らかにしようとして企てたリスク社会や社会システムについての理論には、その社会を存立させている構成員たちの願望(一般民衆意志2.0)に添わんとする限り、その誕生基盤のいかなるものにかか

わらず、大震災直後のような特別の一時期を例外として、危険やリスクに関わる真相を隠蔽することが、システムの維持にとっては不可欠な基本条件として含みこまれねばならない。

もちろん、社会システムの創設にとって、その真相の隠蔽こそは、何にも増して重要な最要諦事項である。『社会システム理論』においてルーマンは、それを「複雑性の縮減」（より単純化すること、より抽象化すること）と呼んでいる。無際限の複雑性にひしめく戦慄と暴力の世界 Welt を、指折り数えられる程度の少数の複雑性に限定し、それをもって世界に代替させる。帆という船の一部のみをもって帆船全体を代替させる提喻方式をもちいて、膨大な複雑性をいつのまにか、人間でも分類、処理できる程度の少数へと減らし、その単純化・短絡化をもって世界処理と詐称する。少数をもって無限を代替し、隠蔽する。一枚の木の葉で世界という無限に広大な景観を隠す木の葉隠れの術を使うのである。その真意は、端的に真相（世界という恐怖）の隠蔽である。世界の実相をいかにさりげなく隠蔽しうるか、そこにシステムの感動的な誕生秘話があったわけである。

隠蔽によってシステムを案出し、かつまた解明しようとしたルーマン自身だけではない。社会システムの誕生・存立に関わるそうした隠蔽実相は、さらにまた、社会システム内の構成員たちにも、ないしは彼らにこそ徹底的に隠蔽される。社会システムは、つまり、その誕生本質からいって a. 世界・危険を隠蔽する装置として創られていると同時に、その広がりと持続のためにも、b. 隠蔽装置であるという事実そのものも、システム構成員たちの眼に可能な限り隠蔽されなくてはならない、という隠蔽の必然性を二重に帯びていることになる。システムという装置誕生時の真相隠蔽を根源的第一次的隠蔽とすると、システムの存立と維持に関わるその隠蔽の方は、第二次的隠蔽ということが出来る。人々すなわちシステム構成員たちにとって、厳しい実相の直視はひどく忌まわしいものであり、大震災直後のような特別の時期を除けば、それは極度に忌避され、最終的には隠蔽の甘い帷がぶ厚くかけられなくてはならないのである。そのシステム形成にとっての絶対条件であるその二重の隠蔽をまとめてみると、次のようになる。

- a. システムは、世界を隠蔽する装置として誕生する。
- b. 「a. システムは、世界を隠蔽する装置として誕生する。」という事実は、そのシステムの構成員たちの願望に基づき、システム構成員たち自身に隠蔽され、かつその秘かなる隠蔽要請そのものが隠蔽されることもまた、願望される。

人が世界に直面する根源的レベルにおいて、まずシステム（や社会システム）そのものが、本質的に世界真相を隠蔽する腐心の装置としてあらわれる（第一次的隠蔽）。システム誕生のそうした根源的レベルでの隠蔽に続いて、社会システムなるものが持続されうるために、システム内に生きる構成員の真相認識忌避の願望に適合したその維持原理が駆動する（第二次的隠蔽）。

蔽)。社会システムは、本質的に二重隠蔽装置として設計・起動・維持されているものなのである。

システムにおけるこうした隠蔽体質の必然性は、『社会システム理論』（1984）の十年ほど前に書かれた前述の『信頼：社会的な複雑性の縮減メカニズム』（1967、1973、大庭健、正村俊之訳、勁草書房、2007）においても、すでに次のように明快に語られていたものである。

信頼において目されているのは、むしろ、複雑性という根源的問題（第一次的問題）に対処するための、ひとつの代替的定式（すりかえの呪文・公式）Ersatzformelなのである。信頼は「問題の解決であるよりも、むしろその難題である問題に代って定式化された」問題であり、また（つねに）そのような問題としてあらわれる。複雑性は、欺くことなど不可能なリスクである。（だが、）もはやそれを避けることができないというのであれば、そのリスクを引き受ける形式の方こそが決定的となる。（『信頼：社会的な複雑性の縮減メカニズム』第四章、大庭健、正村俊之訳、勁草書房、2007、pp.53-54、〔 〕内補足は訳者、但し訳の修正、（括弧）内補足、下線は高橋。Flexibles Taschenbuch, S.32、）

ここにいう「リスク」とは実は危険 Gefahr のことであり、「代替的定式」Ersatzformel とは、複雑性という危険な混沌状態を直視しなくてもすむように、複雑性という解決不能な巨大な問題の解決に関わるのはやめて、システムという自己の内部の小さな問題の方に視線をずらす、帆船全体を小さな帆のみで代替させる提喻のように、細部の些末的なものへとすりかえ本来の問題を隠蔽する、効果抜群の呪文 Formel やマニュアルのことである。欺かずに欺くそうしたあやしげな魔法の呪文（定式）のひとつが、その書物『信頼』では、信頼なる機能に探求されている。先にはこれを詐術と呼称したが、そのような操作は、限りない暴力としての宇宙・世界に投げ出されている脆弱な人間が生きのびるためには絶対に不可欠な、必然的詐術という意味での詐術であり、自然・世界から人間たちの領分に意味なく、ランダムに放たれる理不尽な落雷を防ぐための避雷針、という意味での詐術である。無数の眼に見えないゴール攻撃に同時に孤独にさらされているゴールキーパーのようなものである。したがって、そうした詐術システムが捻出される経緯は、単純化すると次のようなものとなる。

- (1) 「リスク（危険）がある／リスク（危険）がない」ではなく、リスクは無条件にあり、
「リスクがある／破局のみがある」が不可避である場合、
リスクを引き受けることは自明かつ必須なこととなる（リスクの遍在）。
- (2) とすれば、そこにおいて決定的なことは、
その危険なリスクをどのように引き受けるべきかの形式だけである。
何を隠蔽するために何と何をどのようにすり替えるか（隠蔽装置の組立て）と、その

隠蔽したことを、どのようにして曖昧化すべきかである (多重隠蔽技法の案出)。

- (3) リスク防御装置としてのシステム設計は、まず第1に、その攻撃をどのようにしてでもかわす詐術機能を有する装置としてこそ設計されなければならない (システム理論構築)。

緩衝形式、すりかえ形式として機能するためには、どのようにして設計されなければならないか、それがルーマンのシステム理論構築に課せられた必要条件であった。

9. 根拠なきを学び、広げよ

外世界の恐怖をいかに巧みにそらしうるか、上記の『信頼』(1969/1973)は、それを三つの、ないしは三段階で遂行されるある種の瞞着技法として論じている。システム本体のメカニズムがつまびらかにされるのは1984年の『社会システム理論』であり、早い段階からシステムには強い関心を示していたとはいえ、この『信頼』が書かれた時点のルーマンには、システムの内部はいまだ不明で、システムそのものがどのような仕組みでできているかが論じられる直前で論は途絶し、考察はシステム本体とその外部との渉外関係に限定して論じられているにすぎない。にもかかわらず、その第四章には、外の世界の恐怖をすり替え隠蔽する一般化 (抽象化) のためのきわめて重要な方策が三つ、①外から内へ移すこと、②学習を学習すること、③シンボルによって持続させることというように、かなり具体的に示されている。

信頼によって期待がこのように一般化されていく過程にかんしては、我々のさらなる考察にとって、少なくとも三つのアспект (観点・局面) が重要な意味を持つ。すなわち、信頼による期待の一般化の過程は、

- ① 問題状況を「外」から「内」へ部分的に移すこと、
- ② 学習する過程、そして
- ③ 環境世界での諸結果をシymbol的に固定すること

を含んでいる。

(『信頼』第四章、p.44、ルビの変更、①②③の数字、改行、空行、括弧内補足は高橋、cf. *Flexibles Taschenbuch*, S.27)

「期待の一般化」における一般化とは、短絡による抽象的なすりかえ、ということである。その手口は三つで、最初に①「問題状況を「外」から「内」へ部分的に移すこと」が示されている。

それは、本来常時変動していて不可測である現実領域の運動を、(現象学的還元によって)暫定的に静止させ、処理可能なもののみをそこから恣意的に選別して、虚構的に設定された一種の亜空間へと引きずりこみ、そこにおいて数値化しうる運動としてのみ評価する操作のことをいう。

かりそめな静止状態を擬制的に仮構するものとしてのこうした亜空間は、実は、科学史的には17世紀デカルトのいわゆる「延長空間」としてあらわれていたもので、現実から乖離して、調和と理性があるだろうと祈願した虚構領域の方へ擬似的に延長させて創りだされた、いわば宇宙ステーション的な人工空間のことである。そこでは、事象は数学のみをもちいて記述され認識されるという幸せな人工性を強度に帯び、希望した合理的記述に抵触する危険で雑多な要素は、逆に非合理なものとして捨象される。現実事象のうち、亜空間(精神空間とは異なる物理的な広がりを帯びつつも、自然界そのものとは異なり、非在する架空の延長空間)にとって制御可能にみえたものだけが、いわば都合よく選択され処理されてきたのである。

さらに、リスク・危険の突発的な波状攻撃を回避するには、個々人の孤立したシステムの個人ゲームよりも、それらが集合したより大きなシステム(社会システム)による方が、途轍もない衝撃を分散させ、より効率的より曖昧に吸収、発散しうる可能性が期待され、そしてより安全ではある。そこで、夥しい個別の心理システム群をつなげる抽象的で平滑なプラットフォームが、社会システムとして勧請され、疑似的安全の甘い幻影を漂わせる。その疑似的なプラットフォームである社会システムに包まれ庇護されているならば、リスクや危険の毒性も大幅に軽減され、万事支障なく、スムーズに処理されうると期待されたのである。システムの構成員にとって、宇宙や自然のもたらすそのような恐怖や不確定性を常時意識することは忍耐の臨界点をこえており、それへの恐怖は精神をゆがめその崩壊をもたらすものとなりうる。「失敗学」の苦い知が教示しているように(畑村洋太郎『失敗学のすすめ』講談社文庫、講談社、2005、第三章)、いやなことは極力見ない、忘れるというのが人類の基本性向であるとすれば、集合的叡智は、破局の源である世界と直接境を接する戦慄的な界面を極力見ないこと、それを極力隠蔽することをこそ大原則として初めて存立するものである。

したがって、生きのびるためにはどのような捏造もいとわないシステムの隠蔽欲動は、①内部への非論理的な転位や移送という根源的レベル(第1段階)でのすり替えに即続いて要請される第2のシステム形成・維持の段階において、システム形成の根拠の欠落(中空性)を敷衍する機能をになう②学習の学習として、より顕著に開花する。というのも、その学習とは、根拠なきシステムの諸原理や疑似根拠を決して疑わない、そのいかがわしさ(中空性)を問わないことの学び、すなわちそれら疑似的な根拠を真なるものとして是認し、そのまま素直に学ぶ学び方の学習だからである。

そして、その学び方の修得という第2段階の後、その美しい方法によって学ばれ信じられる根拠なき内容が、教条として掲げられ、反復される。しかしながら、システム構成員が是認

すべき内容に得心しそれを持続的に信じるのは、その偽りの擬似的根拠が③簡明な物語に単純化されて、いわば衆目の合意として気高く輝く憲法のように、執拗なコマーシャルのように意味ありげに反復される場合だけである。そして、その第3段階が、世界における法外な複雑性を僅少の複雑性に極力縮減してわかりやすいものに落とすシンボル群が描き出す連関図形成と提示の機能である。これは、ほとんど洗脳機能といいかえてもよい。

物語（連関図）が単純化されるのには、意味がある。複雑な論理や錯綜した留保や思索というものは、それがいかに真実を衝いていようと、社会システムの構成員たち（心理システム）の心に届くことはなかなかむずかしいからである。複雑性が高度に昂進させられた社会は、その過剰な複雑性のゆえに相互理解において困難を内包し、統一的理解の共有をもちえないことによってみずから瓦解する危険性に瀕している。いかに世界に複雑性が満ちあふれ、その複雑性を縮減して社会システムその他の諸システムが捻出されていたとしても、社会システムの構成員たちの興味と志向は、みずからの足元を崩しかねない事実の認識とは逆に、むしろそうした忌まわしい事実への直視を極力さけることにある。もちろん、時にはリスクや破局にこそ食指を動かし、また事実、自身とは直接に関わりのない次元では、陰惨なリスクを異常に好む暴力的性向に恵まれているとしても、人々にとって「リスク／破局」などは原則ありえず、また「リスク／危険」でさえも基本的には忌避される。つまり、人々にとってはいつであっても、「安全／やや安全」というありうるはずのない構図こそが理想であり、また大きく譲歩したとしても、旧来のリスク図式である「安全／リスク」以外であってはならないのである。

それゆえ、ルーマンが新規に提起した新図式「リスク／破局」が、社会システム論形成の原則や理論への基本的認識として具体的に提示されればされるほど、それは構成員一般には強く忌避される必然性に伴われており、またルーマンによってなされる、安全な社会像に対する伝統的な幻想の破壊（「リスク／危険」提示）も、彼が批判した「安全／リスク」や「安全／やや安全」神話へといつしかすりかえられていくことは避けられない。いうまでもなく、そうしたリスクの自明化、遍在化の認識も、時とともにすりかえられ、隠蔽され、そしてまたその隠蔽されていることが隠蔽され、その二重の隠蔽事実やメカニズムも当然のこと深く隠蔽される。ルーマンのリスク観は、その社会的認知の浸透にもかかわらず、その内実においては空洞化する新しい「リスク」をそれ自体はらんでいるのである。

ルーマンのリスク、すなわち社会システム理論は、その根元においては世界破局すなわちメドゥーサの闇の閃光（複雑性と無意味の極）から眼をそむける隠蔽装置の巧妙な仮構的構築を基底とするものである。しかしながら、その社会システムという仮象の中に暖かくないしは危うく包まれているシステム内構成員たちにとっては、その優しい隠蔽にすら最低限含まれざるをえない諸リスクへの直視ですら、本音をいえばはなだ迷惑なものである。社会システムという仮象の仮象性を暴露しながら、ルーマン自身は、社会システムに生得のその隠蔽偏愛体質によって論理的に裏切られるという、二進も三進もいかない悲喜劇的なパラドックスを課せら

れているのである。

10. 社会をシステムとして見る系譜

そのニクラス・ルーマンは、1927年北ドイツの町リュネブルクに生まれ、南ドイツのフライブルク大学で法学を専攻し、行政に関わった後、1960年代初めの米国ハーバード大学へ留学する。その留学時にタルコット・パーソンズ Parsons から社会学の薫陶をうけている。『信頼』（1973）、『社会学的啓蒙』シリーズ、『社会システム理論』（1984）、『社会の経済』（1988）、『リスクと危険』（『社会学的啓蒙 5』1990）、『社会の科学』（1990）、『リスクの社会学』（1991）、『社会の芸術』（1995）、『社会の社会』（1997）等、1998年に世を去るまで社会とシステムに関わる思弁的で難解な大部の著作を多数著し、多様な考察を行っていく。フッサールの現象学、デリダの差異記号論、スペンサー＝ブラウンの形式論理学、ディルタイやガーダマーの解釈学（解釈学的循環）、デュルケームやパーソンズの社会システム論、チリの神経生理学者マトゥラーナたちが提唱したオートポイエシス（自己組織化）論等、異なる思想伝統を結び合わすヘーゲルの総合をめざす。全体社会 Gesellschaft を俯瞰しようとするその独創的でパワフルな理論は、社会学のみならず、宗教、教育、経済、法律、環境運動、リスク論等、実に多くの分野に大きな影響を与えつつあるが、その核となる考え方のひとつは、個人の心理や社会等がそれぞれ独自の異なるシステムをなしている、とするシステム論的見方である。心理システム（個人の意識）と社会システム（コミュニケーション）とを双軸として社会の全体を明らかにしようとしている。例えば、社会はそれ固有の法則をもち、形式的にもある整合性を有している。社会は、個人がたんに集合したものではなく、それを超えたある集合的な総体としてあるとする考え方、これがシステム論的理解である。システムが、ある意味円を描いて閉じている。

社会をひとつのシステムとして見るこうした考え方の始祖ともいえるべきは、「全体はその諸々の部分の総和（somme）とは異なるある別ものであり」（『社会学的方法の規準』宮島喬訳、岩波文庫、1990、p.207）、「社会は、諸個人のたんなる総和であることをやめ、諸個人の結合によって形成された体系をなす」（同、p.207）とした、19世紀末に活躍したユダヤ系フランス人社会学者デュルケーム Durkheim（1858-1917）である。社会学そのものはサン・シモンの秘書であった19世紀前半のコントによって命名されたといわれているが、社会を総体として把握する具体的な方法論を案出し、すぐれた実践によって社会学の方法論を確立したのは、19世紀末に主著の『社会分業論』（1893）や『社会学的方法の規準』（1895）、著名な『自殺論』（1897）を著したデュルケームであるとされる。その晩年となる20世紀初めの『宗教生活の原初形態』（1912）がその典型であるように、デュルケームは、非西洋世界を解説する文化人類学と、西洋内社会を解析する社会学とを連結させることによって、非西洋世界の人類学的成果から、西洋社会特にフランス社会のメカニズムを総体として浮かびあがらせようとした。ユダヤ系ドイツ人ジン

メルやマックス・ヴェーバーたちが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1904-5)等の諸著を世に問い、社会という前景化しつつあった謎めくものを解明しようとしていたのと同じ頃のことである。

1893年の博士論文『社会分業論 上下』(井伊玄太郎訳、講談社学術文庫、2003)や晩年の『宗教生活の原初形態上下』(古野清人訳、岩波文庫、1975)に顕著に示されているように、デュルケームは、19世紀の終わりに植民地支配の拡大にともない勃興しつつあった民族学すなわち文化人類学における膨大な調査、観察、収集の成果や、それに基づく着想(ロバートソン＝スミスやフレイザー等が、その代表的な研究者たちである)に基づいて練られ、獲得されたものである(cf.メアリ・ダグラス『汚穢と禁忌』ちくま学芸文庫、2009、第一章、原著1966)。非西洋のある未開民族の風習を調べる場合、祭祀制度も食事も武器も西洋文化では忌避されがちな性も含めて、すべてがその部族の社会総体にとって機能するものとして水平的に、機能的に等価に眺められなくてはならない。そうした全体が、社会の外側から、冷徹なまなざしで科学的に解析されていく。植民地経営のために、そして想像を絶する異世界に直面して震撼する西洋の科学者たちにとって、対象を可能な限りリアルに冷徹に把握することが要請されていたからである。ところが、民族学に要請されたそのようなメタ的な視点、すなわち社会というすべてが連環するシステム内の諸要素を、高下をつけず、等価に理解する方法論が、ブーメランのように西洋社会内へとはねかえってくる。すると、それまでの混沌たる自身の社会、すなわち世紀末のフランス社会や西洋社会もまた、非西洋の未開社会と同じように、複雑さのレベルに違いはあれ、これまた連環したひとつの総体として、外側から一括して、メタ的に(俯瞰的に)把握されうるものとして現れる。複雑きわまりない近代社会も、ひとつの機能的な装置やシステムと見なそうとするいわゆる機能主義的、構成主義的な見方に、デュルケーム社会学はたどりついたのである。社会学は、文化人類学、なかでも植民地的な民族学に優しく手を導かれて、初めて自己を確立するにいたる。

そのデュルケームの社会システム論的発想は、20世紀半ば、1950年代にそれを展開していったアメリカ人社会学者タルコット・パーソンズ Talcott Parsons の社会システム論(『社会システム』The Social System, 1951、邦訳『現代社会学大系14 社会体系論』佐藤勉訳、青木書店、1974)へと継承される。そして、そのパーソンズに直接師事して、その考えを批判的に受けついでいったのが、ドイツ人社会学者ニクラス・ルーマンの新しい社会システム論である(ルーマン『ニクラス・ルーマン論文集1 法と社会システム』『同2 社会システムのメタ理論』新泉社、1985。ルーマン『社会システム理論の視座』木鐸社、1985。cf. クニール、ナセヒ『ルーマン社会システム理論』新泉社、2007。エルマン『社会学の言語』白水社、文庫クセジュ、1993)。

だが、こうした社会システム理論が世紀末の1890年代に登場したのは偶然ではなく、世紀末に主題とされていた個人や主体の凋落や消失と、その新しい見方とが連動していたためであることは明らかである。というのも、社会システムという考え方の背景には、確率論を初めとす

る個や主体性の希薄化やその衰微傾向がひそんでおり、社会システム論としてシステム機能が言及される時、その創始者のデュルケームであれ、中興の祖パーソンズであれ、主体性の抹消への淘汰圧が否応なく随伴してこざるをえない。それゆえ、そうした先達たち以上にはるかに機能的なシステムとして、サイバネティックス的な方向をさえ明確に強化した趣きのあるルーマンのシステム理論が、自己準拠としてのシステム同一性をさらに導入する時、個人の主体性はいちじるしく希薄化する。システム・エンジニアさながらに社会システム理論の構築にいそしめばいそむほど、パーソンズやルーマンたち自身の意図とは別に、個人の主体性なるものは、よりいっそう相対化や、最終的にはその消失の黒い波浪の中にのみこまれていくことになる。

そうした主体の脆弱化や希薄化は、「ウィーン世紀末」の詩人ホフマンスタールの名高い「チャンドス卿の手紙」Ein Brief, 1902 (『ホフマンスタール選集3 論文・エッセイ』富士川英郎訳、河出書房新社、1972) 等、「ウィーン世紀末」に鮮明に現れていた現象で、そのホフマンスタールがその2年後に発表した「詩についての対話」Das Gespräch über Gedichte, 1904 ともなると、自己は鳩小屋のような中空として語られる(同選集3、pp.48-49)。そのホフマンスタールがドイツのゲッティンゲン大学において行った名高い講演「詩人と現代」Der Dichter und diese Zeit (1907) での、究極の水平的全的開放性として詩人を定義するその徹底的な受動性ビジョンに強く触発されたフッサールは、—— その講演に感動したフッサールはホフマンスタールを自宅に親しく招いている —— 後に「間主観性」等の受動性の濃い概念へとたどりつく(木田元「連載 世紀転換期思想史 第十四回 ホフマンスタールとフッサール」、『大航海 歴史・文学・思想』2001、No.38、新書館、pp.235-243。後に『マッハとニーチェ』新書館、2002に所収)。志向性が語られながらも、主体なる概念が今や曖昧化して、具象が黄金の文様に融解しつつあるクリムトの『接吻』(1907-1908) さながら、ほとんど消えかけている微妙な状況がそこにはうかがわれる(『デカルト的省察』1931、浜渦辰二訳、岩波文庫、2007)。

そのフッサール現象学を継承したルーマンが、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(1935-38、細谷恒夫、木田元訳、中公文庫、2006) を著した20世紀前半のフッサールにおける強い危機 Krisis 意識とともに、その折りに間主観性という概念において発症していた主体の揮発化現象を踏襲していくのは、自然な流れではある。その主体融解の系譜に、20世紀後半、デリダやドゥルーズ等のポスト・モダンの思想家たちがより過激に押し進めていった主体の花吹雪の離散光景が加わる。そうしたデリダたちの差異概念によって強く洗礼をうけた痕跡は、差異、他者、多様な可能性群の潜在、不確定性、偶然などの諸概念のルーマンにおける積極的な受容にはつきりとあらわれている。システムからも、現象学からも、差異概念からも、今や崩れだけがある。

ルーマンのシステム理論は、そうした二重、三重の崩れと融解の伝統の中にある。だが、ルーマンは、その偶然や不確定性をこそみずからの方法論(着想、仮説、偶然と実験のドラマトゥ

ルギー)へと反転させていった先達のデュレンマットに倣い、その多重の崩れをこそ逆用することによって、世界というリスクと崩れでしかないものへの挑戦と防御を企てる。毒をもって毒を制する、毒に対抗する。それが、ルーマンの社会システムという一見確定性の気配ただよふべき仮構物(仮象)の、崩れ(不確定性)にこそ基づく反語的な構築なのである。

11. 破局の世界——盲目のディオニュソス

『社会的啓蒙』(1974)の中でルーマンは、社会システムというものを、次のように定義している。

社会システムを、ここでは、互いに指示しあい、それらには属さない諸行為たる周界(環境)から区別することのできる、社会的諸行為の意味連関と理解するべきである。内部と外部の差異化のうちに自己の構成原理をもつこのシステム概念を前提にし、さらにこの概念を超越しようとするならば、もはやいかなる境界もない準拠単位、つまり世界が問われることになる。しかし世界はシステムとして把握されえない。なぜなら世界には自己と区別すべき「外部」がないからである。(『ニクラス・ルーマン論文集1 法と社会システム 社会学的啓蒙』土方昭監訳、新泉社、1985、p.130、周界への括弧内補足(環境)、下線は高橋)

システムには必ず内と外とがあり、境界を挟んでシステムは外と接している。では、そのシステムは何と接しているのか。外とは何なのか。それが、いかなる境界ももたず、人には見ることのできない限りない外部、世界とよばれている外部である。ルーマンの主著のひとつにして思想的転換点を画するとされるその十年後の『社会システム理論』(1984)では、先のデリダの差異概念を取り入れ、世界について次のように思弁的に語られている。

本書では、世界概念は、システムと環境の差異の意味統一体を言い表す概念として使用されており、この概念は差異を欠如した最終的概念として用いられている。(…)根源的にまた現象学的に把握されると、世界は把握不能の統一体として提示されることになる。(ニクラス・ルーマン『社会システム理論 上』第五章第八節、佐藤勉監訳、p.329、下線は高橋、stw, S.283)

わかりにくい言い方なので、ルーマン研究者のクニールとナセヒによる世界についての平易な解説を引用してみよう。

システムと環境との差異を問題にする機能——構造的理論にとっては、すべてのものはシステムであるか環境であるかのいずれかである。こうした事態の唯一の例外をなしているのが、世界である。世界はシステムではない。なぜなら、世界は、みずからを限界づける外的なものをもっていないからである。しかし世界は、環境としても理解されえない。なぜなら、それぞれの環境は、逆に、それ自身ふたたび環境に属することがないような内的なものを前提しているからである。世界はシステムでも環境でもない。むしろ、世界はすべてのシステムとそれに属する環境を包括している。したがって、世界はシステムと環境との統一である。生起するすべてのことは、世界のなかで生起する。したがって、システムの存続を維持するすべてののはたらきも、その存続を危機に陥れるすべてののはたらきも、それを絶滅させるすべてののはたらきも、世界のなかで行われる。こうした考慮に基づいて、ルーマンは世界を機能的分析の最高の準拠点として選択する。世界が境界をもつのであれば、その背後には外的なものがあり、それを目指して境界を超えていくこともできるだろう。しかしそうではない以上、世界をのり超えることはできないのである。(ゲオルク・クニール、アルミン・ナセヒ『ルーマン 社会システム理論』 舘野受男、池田貞夫、野崎和義訳、新泉社、2007、p.46、下線、傍点は高橋)

この『社会システム理論』の10年ほど前に書かれたシステムなきシステム理論ともいうべき『信頼』では、次のように語られている。

人/間は、そのような世界の法外な複雑性に、無媒介で直面することには耐えられないのである。(『信頼』、勁草書房、pp.1-2、下線、傍点、改頁の印/は高橋、Flexibles Taschenbuch, S.1)

物理的あるいは生物的な単体であれ、あるいは石、植物、動物であれ、世界内のあらゆる種類の実在的なシステムにとって、世界は過度に複雑である。世界は、システムが自己を維持しながら反応しうる以上の諸可能性を含んでいる。システムは選択的に構成された「環境」に適応していくのだが、環境と世界の間の何らかの断絶に直面すると瓦解してしまう。

(『信頼』第一章、p.7、下線は高橋、Flexibles Taschenbuch, S.5)

私たちは、不可測、不規定である最終的準拠としての世界というとてもないものの中に、無惨に放り出されている。不可測であるのは、世界が人間の理解をはるかに超え出た複雑性の極みであるからで、その意味でそこは未規定、不確定性のみがある状態といえる。そこにおいて、ではどのようにして人は生きのびることができるのか。限りない複雑性を、人の有限な力でも安全に処理しうる何かに変換することによってである。それが複雑性の縮減 Reduktion や

選択性 Selektivität としきりに呼ばれている抽象化操作であり、そして、その延長線上に構築されるシステムによってである。

しかしながら、ひとり人間においては、世界の複雑性そのものが自覚されるとともに、環境が選択的に構成されているということが自覚され、そして、そのことによって自己を維持していくときに準拠すべき問題が自覚される。人間は、世界をテーマ化して捉え thematisch erfassen、単なる可能性を、またそれらについて自分が無知であるということをもテーマ化して捉えることができ、また、決断を下さなければならない者として自分自身を認識することができる。(『信頼』p.7、下線、独語補足、訳の微修正は高橋、Flexibles Taschenbuch, S.5)

複雑すぎて問題化(テーマ化)など論外である世界から、ほんの数条のみを恣意的に抽出し、その束を複雑性の問題として提示、そしてそれを解決することによって、世界は解決されうる問題と答えの束として可視化され、処理されうるものとなる。限定すなわち抽象によるテーマ化という人工的操作によって、不可視の世界も、デカルト的「延長空間」式の安全なものへとすりかえられる。世界は、今や人間の手によっても十分に制覇しうる“諸問題”へと無事変換されていたからである。

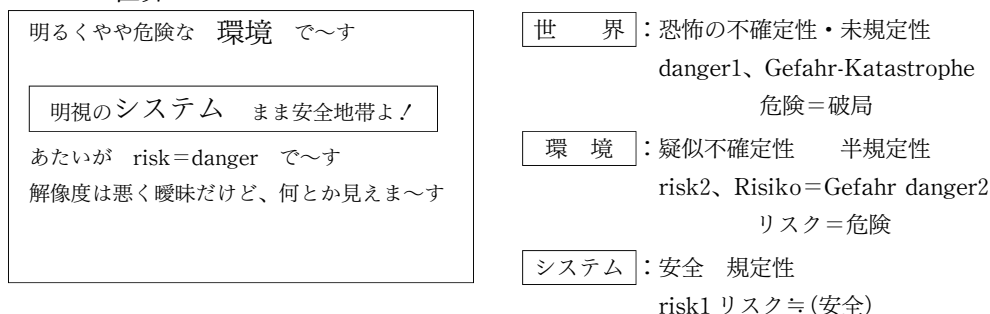
12. ルーマンの〈システム／環境／世界〉

さて、その「延長空間」的システムには、そのシステムそのものを構成する部分としての各要素があり、それら諸要素間の諸関係があり、それらが担う機能があり、そしてそれら諸機能全体を統括する最終的な制御総体がある。システム論では、さながら技師によるコンピューター機能の設計同様、機能にこそ照準が当てられ、すでにふれたように、人間という主体はほとんど消えつつある。主体は揮発化し、システムだけが、非主体的な機能主義だけが、駆動する。システムの外部には、見えない世界が茫洋と広がってはいるが、システムとは、世界という危険な外海を自身の意識からはずし、それを見ないがために、隠蔽するために特別に捻出された隠蔽特別仕様の装置である。それゆえ、システムという自己自身をつくりだすやいなや、自己を脅かす外部が存在することをさえ隠蔽し、最終的にはその存在可能性をも抹消してしまう。外海・外界すなわち世界は、システムにとって存在してはならないものとしてある。

その危険な世界にかわって、いわば危険な世界のやや安全な代行人として、環境 Umwelt という周縁的なベルト地帯を外輪山のように自己の周辺にぐるりめぐらせる。周りをとりまく世界ということで、ルーマンはそれを環境 Umwelt と呼んでいる(『社会システム理論』第一章)。システムを取り囲む外部領域という意味での環境である。その環境 Umwelt は、システムとは

図 8

不可視の 世界 破局のみ 見えないし見たくない！



異なり、それとは一見対立するものの、真に危険な世界を見ないがために世界という複雑性の極致の代行として配置されているものである。外部との境域として、しかしまた自身の分身としてシステム自身がぐるり設定したものである。それゆえ、システム本体とその環境とは不即不離のものであり、システム本体と環境との間には、ある程度の葛藤や軋轢はあるものの、結局は睦まじく愛し合うカップルのようなものとしてある。その意味では、すでにシステムの一部や分身ともいべきものである。したがって、この自己というシステム本体と、それをめぐる環境というやや外部的な境域の二つをあわせたものとして、いわゆるシステムなるものが構築され、作動していることになる。

システム本体本丸を中央に配置し、その周囲を城郭を取り囲む外濠のように、環境なるものがぐるりとめぐらされている。もちろん、そのさらなる外には世界という狂乱の荒海が限りなく広がっているが、それは隠されていて見えない。それもそのはず、その[システム(本丸)/環境(外濠)]という妖しげな区分が案出されていたのは、幾度も指摘しているように、世界を見ないがためであり、したがって、世界が見えないのは当然至極のことなのである。その関係をわかりやすく図示してみると、図8のようになる。

ルーマンが『リスクの社会学』(1991)において、伝統的な[安全/リスク]という対立項を廃棄し、[リスク/危険]という新対立項への移行を示したことについては、「5. リスク/危険/破局」において詳説したが、そこにいうリスクという語は、アラビア起源ともいわれるイタリア語 *rischio* に由来するもので、ドイツ語では *Risiko*、英語では *risk* によって (SR, S. 17f.)、それに対する危険の方は *Gefahr* すなわち *danger* によってあらわされている。リスク論では一般に、人為的なものがリスク *risk*、天災的なものが危険 *danger* とされることが多いが、ルーマンの場合、天災であれ人災であれ不確定性 *Unsicherheit* や未規定性 *Unbestimmtheit* のひしめく戦慄的な世界 *Welt* からの距離に応じて測られているため、人間が生きのびるために抽象化した毒抜き不確定性をリスク *Risiko*、そのような人間の操作の立ち入ることが躊躇される両義的な不確定性が危険 *Gefahr* と考えられている。しかし、その危険 *Gefahr* のさらに先に、

人間は所詮蹂躪されるだけとなる世界の絶対的な不確定性すなわち破局 Katastrophe が隠されていることは、しつこく論じたとおりである(「5. リスク／危険／破局」「6. 危険 Gefahr の両義性」)。不可視の恐怖の世界において、危険が破局の走狗として、破局的危険 (Gefahr-Katastrophe) として跳梁し、非力な人間にはその不条理をどうすることもできない。「リスク／危険」とは、要するに「リスク／破局」の変種にすぎない。

それに対して、システム本体本丸をぐるり取りまく周辺部の環境 Umwelt と呼ばれている領域は、外部(危険)がなかばその中に浸透していてやや曖昧であり、そのため鮮明な解像度としてはいまひとつ劣るものの、一応見ることでできる可視的領域である。ルーマンは、ここに抽象化(単純化・縮減化)によって毒抜きされたリスク的危険 Risiko-Gefahr たちを配置・放流する。そして、そのリスクたちがびちびちと跳ねているこの環境 Umwelt という、ややくすむ周縁部分に囲まれ護られた形で、システム本体本丸という明視可能な自己、自我 Self すなわち問題ぶくみの主体が来るのである。

何度も指摘してきたように、システムとは、世界という破局や破局的危険 Gefahr-Katastrophe を極力見ないがため、それを隠蔽するための隠蔽特別仕様装置、自己に引きこもるための装置である。しかし、引きこもるとはいえ、世界という外部は、人間に配慮することなく容赦なく襲いかかってくる。その世界・破局対策もまた必要ではある。そこで導入されたのが、世界という破局の毒性を大幅に薄めた免疫領域である。破局の劇毒に直接冒されることはないものの、やや破局らしき危険、すでに危険のスペクトルの中でリスク的危険へとすりかえられている疑似破局的危険にふれて、その火傷の激痛に跳びあがるくらいは必要とされる。つまり、飼い慣らした疑似破局的危険(リスク的危険)によって外部から放たれる激烈な落雷への恐怖を、避雷針のようにして巧みにそらす。それが、毒性を抜かれた、やや危険めくものの何とも可愛いリスクたちがうようよと放流されている、やや危険な環境 Umwelt という外濠部分なのである。

例えば、鍋島藩にはお城があり本丸がある。その周囲にはぐるりめぐらされた深いお濠がある。その深いお濠という周縁部に、半ば安全化された危険(リスク)として、危険性はややはらむものの、しかし巧みに去勢されてもいる中途半端に危険なものたち(リスク)が放流されている。そこには、人を食うピラニアや獰猛なワニ、あるいは化学物質、微量の放射能セシウム、コンピューター・ウィルス等のような注意を要するリスクたちがひしめいているかもしれない。お濠は、外界(世界)とも少々つながっているらしいため、得体のしれない外部、他者たちがいくらか入りこんでいる可能性があるからである。しかしながら、その程度の危険であれば、注意を払うことによって、あるいは対策を講じることによって、人間的に、つまり人間の力でもそれなりに処理することができる。それなりに免疫をもつことができるのである。そのやや危険なリスクたちを境域に配置する戦略によって、システム本体本丸はしかと護られ、それどころか、そのようにやや際どいお濠の存在は、何より刺激的で愉しい創発の豊かな苗床

図 9

〈Katastrophe〉				
1) 手の付けられない破局	破局	世界	Welt	danger1
vs				
2) 比較的弱い両義的危険	危険	環境	Umwelt	danger2 risk 2
3) 比較的安全にみえるリスク	リスク	システム本体	System	risk 1
〈System〉			cf. 図 6	

とさえなるのである。

この世界には、生態システムとしての自然があり、その中に人間もまた生かされている。人間には個々人がいて、それらが集合して一つの集合体すなわち社会があらわれる。ルーマンは、そうした人間一人一人もそれぞれ、そのようなシステムとして感じ、考え、行為していると考えた。まず人間個々人である**心理システム**なるものがあり、その心理システムが複数集合して総体としての**社会システム**が発生する。それらは異なる規模、異なる機能(意識、コミュニケーション)を有しているが、いずれの**システム**もそれぞれに、**世界**という危険な奈落(破局)に晒されつつも、不確定性の氾濫(世界)から巧みに眼をそむけ、自己の内にもぐらのように引きこもることによって、か弱い自己を防御しようとするという点では共通している(cf.カフカ『巢穴』Der Bau, 1923-24)。システムは、致命的な諸危険(破局)から、人や組織を防御し庇護するべく、**環境**(疑似危険・疑似破局)というセイフティー・ネットをぐるり張り巡らせていると同時に、そのシステムそれ自体が、すでに不可視の破局に対するセイフティー・ネットとしてこそ創出されているものだからである。

しかしながら、自己に引きこもりうるとはいっても、世界(破局)に襲われたとき、私たち弱い人間たちを選びうるのは、1)手のつけられない致命的な破局(世界)への全面的な敗北か、2)比較的弱い危険状態(リスク的危険)に逃れるか、3)比較的安全に見える安全(システム本体)に意味なく赤子のようにくるまるか、の3つだけである(図9)。

しかも、3)引きこもりうるかにみえた内奥の本丸であるシステム System 本体も、一見安全に見えるとはいえ、つまるところ、2)環境 Umwelt という生け簀^すの中でリスク的危険がいわば飼^すい殺^すにされる戦略がとられていたことによる、暫定的な目くらましとしての安全でしかなく、相対的に安全にみえるというにすぎない。最初から安全な安寧の地は、もはやどこにも存在しえないからである。それゆえ、世界に対峙^ししうる選択肢は、実質的には[比較的弱い危険状態(リスク)/強度に危険状態(危険)=破局]であって、極論すれば、要は危険濃度が強弱異なる二種類のリスク、二種類の危険があるにすぎない。その危険度の弱いリスクの方をシステム本体すなわち安全とし、危険度のより強いリスクであると同時に危険度の弱い破局を、環境と呼んだだけのことである。現代は、そしておそらくはるかな太古より、人類にとっては

〔リスク／破局〕の二項対立だけが真にリアルであったに違いない。

そして、その基本的生存様態に加えて、テクノロジーを発達させた結果、現代における人類のリスク危機濃度は飛躍的に増し、テクノロジーの力を発揮してそこから逃れてきたはずの宇宙・世界という恐怖の坩堝へと、ふたたび落下しつつある。〔リスクすなわち超弱性の破局1／破局すなわち真正の破局2〕の構図こそが真正なるものとして剥きだしにされ、私たちは、今やその望まないはずの破滅の淵へと、引き寄せられるかのようにみずから進んで近づきつつあるかにみえる。その破局が、バックが『危険社会』Risikogesellschaft（1986）において警告していた「危険社会」すなわち破局のみが咆吼する恐怖社会の到来である。

13. 「現実の絶対主義」と、抽象衝動の反抗

制御やや可能なリスクとは逆に、真の外部であるその不可知不可測の世界の方は、あの黒い大津波のように、まったくもって手に負えない危険きわまりない破局領域である。その災厄のみの恐怖世界は、すでにのべたように、ルーマンより七歳年上でデュレンマットより一歳年上となる同時代人、現代ドイツを代表する思想家ハンス・ブルーメンベルク（1920-1996）がその『神話づくり』（1979、邦訳『神話の変奏』2011）の中で、その絶対性にちなんで「現実の絶対主義」Absolutismus der Wirklichkeit と命名していたものである。破局は絶対的で、現実には破局だけがあるという意味である。それが、私たち人間がおかれているこの世界での基本的な光景だとする。

人類は、近代における科学技術の躍進、現代における IT 技術の爆発的拡大等、自然に勝利する「近代の正統性」（ブルーメンベルク）を謳歌することによって、内からは金融危機、食料危機、環境破壊、戦争、原子力発電所の崩壊等の巨大災厄を引きよせ、外からは大自然の逆襲による破滅を招き寄せる。大いなる制覇そのものによって、逆にみずからの首を絞める自縄自縛の罠におちいつている。人がその凱歌を挙げた瞬間、世界という恐怖の神は、その戦慄的な相貌を垣間見せたのである。21世紀の現代、超越的神意という天の極、いわゆる第三審級は衰滅ないしは消失し、すべては、19世紀前半にカーライルが幻視していたディオニュソス的な破壊のうねりの、一元的な席捲へと収斂しつつある。9.11テロや3.11の東日本大震災、原発炉心溶融等による震撼は、世界（大自然）の破局レベルの凄まじさと、人知が培ってきた制御能力、破局を巧みに制御可能なリスクへとすりかえる戦略の貧相さを残酷に暴露してみせた。人類は、不可視で不可知な危険 Gefahr（＝破局）すなわち「現実の絶対主義」（ブルーメンベルク）こそが唯一圧倒的な帝王として睥睨する、原初の時代の脆弱な実存状況に、今また無惨にも投げもどされたのである。

それに抗するにはどうすべきか、あるいは正確には、人類はこれまで、どのようにしてそれに抗して生きのびてきたのか。ブルーメンベルクは、先ほどの重要な神話論『神話づくり』（神

話の変奏)』において、あるいはそれにはるかに先立つ1960年の『隠喩学のためのパラダイム』(surkamp taschenbuch wissenschaft, 1998)において、理由なき根拠なき隠蔽を理不尽に行うことによって、とシンプルに解答した。そのような隠蔽を根源的に行う瞬間にして、その魔法の杖なるものとしてブルーメンベルクが導入した概念が、世界という危険な「現実の絶対主義」に対応させて、「絶対的隠喩」absolute Metapher と呼ぶ隠喩である。それは、それ自体で充足する特異点として、社会というイデオロギー体系・概念体系等の起点に設定された不可視の根拠なき根拠、決して疑ってはならぬ自明の問いにして答えであるものであり、魔術的・瞞着的にいつのまにか措定されていたものである。その根拠なき特異点が、災厄満ちる闇の光景をいつしか隠蔽し、そして強力に封印する。そして、その輝かしくもいかがわしいその魔術的封印の後に初めて、多様な隠喩が暗躍するいわゆる「生活世界」が醸成され、さらにその曖昧さを礎石として、しかしまたその曖昧であることを隠蔽して初めて、その上にいわゆる合理的な、正確には疑似合理的な概念体系が、各々の社会に構築されるのである。

だが、それら理性的な体系をも含む人間たちの営みはすべて、畢竟、危険な大自然や世界の中で生きのびるためのサバイバル欲動と、そのための非合理をこそ礎として創出・開発され、維持されているものである。それゆえ、古代から現代に続く西洋の思想史は、そうした根拠なき特異点群と、曖昧で多彩な隠喩群とが土台となって築きあげられた、いかがわしくも気高い諸体系の歴史、つまるところ生きるためには瞞着もいとわない孔だらけの、つぎはぎだらけの、しかしまことにたくましい歴史として解明されていくのである(高橋吉文「隠喩論Ⅳ：ブルーメンベルクの基底隠喩配列」、高橋吉文編『隠喩とメタ思考』日本独文学会研究叢書037、日本独文学会、2005、pp.49-70、高橋吉文「隠喩論Ⅴ：ブルーメンベルク『世界の読解可能性』における絶対的隠喩」、『メディア・コミュニケーション研究』第58号、北海道大学、2019、pp.57-122)。

だが、ブルーメンベルクでは「絶対的隠喩」と呼ばれていたそうした根拠なき絶対的根拠は、ルーマンにおいても、システムを湧出させる基点の非対称性や不確実性 kontingency として登場し、決定的な役割をになう。人間たちが「人間的な、あまりにも人間的な」(ニーチェ)システムを捏造する際の決定的な礎石としてその特異点は、基底的な意味システム、個人の心理システム、社会システム、そして社会システム同士が競合する「全体社会」Gesellschaft、Weltgesellschaft (Soziale Systeme, stw, S.557) の中での諸コンフリクト(葛藤)において、その存立の生命線をにぎり、ほとんど獅子奮迅の働きを行うことになる。

絶対的隠喩によって「現実の絶対主義」という破局を回避するブルーメンベルクにおいても、また無限の複雑性を備えた世界を自身の視界から遮断するルーマンのシステムにおいても、中心的、決定的な働きをするのが、抽象性である。ブルーメンベルクでは、それは虚構という非現実的な想像力となって神話や隠喩を湧出させ、現実からの衝迫を食い止め、息継ぎしうる隙間をどうにかこうにかつくりだす(『神話づくり』Suhrkamp, S.9, 15, 186)。そのメカニズムはルーマンにおいても同様で、無限の複雑性(恐怖)を、一定数の複雑性(危険)へと恣意的

に縮減する、すなわち不確定性を極度に減数し単純化するという抽象的操作(縮減)によって、安心をもたらさうするセーフティ・ネット・システムが立ちあげられるのである。具体的な複雑性の無際限(世界という破局と恐怖)が、限定的な複雑性(リスク的危険、やや安心)へと恣意的に極度に「抽象化」されていく(長岡克行『ルーマン／社会の理論の革命』勁草書房、2007、p.258)。絶対的な危険性を意味する未規定性 Unbestimmtheit や不確定性 Unsicherheit (Gefahr, Katastrophe)が、弱性化された危険性を意味するリスク的な疑似不確定性(Kontingenz 偶発性とも訳される)へとすりかえられていく。

だが、なぜ抽象化なのか。それは、人の眼には見えず、また能うる限り見たくもない領域として意識から排除されているとはいえ、現実の具体的な事象は、その源である不可視の世界と地続きであり同質であるがゆえに、世界に対して距離をとることができず、それに巻き込まれて破滅するからである。それゆえ、具体的な世界に距離をとりうるためには、具体的世界とは異なるもの、非具体的なるもの、すなわち抽象性を動員するしか道はない。抽象性とは、現実から諸部分のみを恣意的に抽出し組み合わせたもののことである。現実ではない。

例えば、そのような思考の先駆者の一人、ウィーン世紀末の科学者エルンスト・マッハは、1883年の『力学史』第4章において、次のように述べている。

2 事実を思想の中に模写する時、われわれは決して事実全体を模写するのではない。われわれにとって重要な側面に関してのみそうするのである。その際われわれは、直接または間接に、実用的関心から生じてきた目的を持っている。われわれの行う模写はつねに抽象である。ここにも経済的傾向があらわれている。(エルンスト・マッハ『マッハ力学史 古典力学の発展と批判 下』岩野秀明訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房、2006、p.264、下線は高橋)

3 原因とか結果について云々する場合は、事実の模写の際にわれわれにとって重要な方向においてその連関に注意する必要のある「二つの」契機を任意に取り出しているのである。自然の中には原因も結果も存在しない。自然はただ一回ここに存在するにすぎない。 A がつねに B と結合している同じ場合の繰り返し、同じ状況のもとでの同じ結果、すなわち因果の連関の本質は、われわれが事実を模写する目的で行う抽象のうちにのみある。(マッハ、p.265、下線は高橋)

そして、そのように恣意的に抽象化されたものだけが、不定形で不確定・未規定なる現実・世界に対して、ある種の距離をとることができるのである。

そうした距離 Distanz は、劇作家デュレンマットでは突飛な着想 Einfall によってつくり出される(Friedrich Dürrenmatt, Theaterprobleme. In: Theater-Schriften und Reden, Arche,

1966, S.121)。ブルーメンベルクでも、それは隔たりや虚構、隠喩、神話と呼ばれ、具体的な世界との違い、溝をつくるとされるが、それは、デリダ式に差異と言いかえることもできるかもしれない。事実、ルーマンがこのフランス・ポストモダンの思想家ジャック・デリダから差異概念を借用していたことは、すでに触れたとおりである。コンピュータのデジタル的プログラミングに刺戟されたかのように、まずは大きな差異が、次には小さな差異が、といった具合に差異による細密な距離づくりが、そこではひたすら図られている。

だが、差異の場合、忌避したはずの世界そのものが無限の差異また差異の純粹差異群であるとすれば(ドゥルーズ)、その差異への差異化を明確に根拠づける操作は、美的な詩や虚構によって溝を刻むよりもはるかにむずかしい。何がその差異を差異として、つまり世界という差異群とは異なるものとして機能すると認知しうるのか、きわめて困難なことだからである。その意味で、「美的是認」(『悲劇の誕生』)を「人間的な、あまりにも人間的な」システムの誕生として提示したニーチェとともに、世界と抽象性との関係を考えるにおいて第一に参照すべきは、美術史家リーグルの「芸術意欲 Kunstwollen」(ヴォリンガー、p.24)概念に刺戟をうけて、美術史家ヴォリンガー-Worringer が20世紀初頭に『抽象衝動と感情移入』Abstraktion und Einfühlung (1908)において唱えた名高い「抽象衝動」Abstraktion である(『抽象衝動と感情移入——東洋芸術と西洋芸術』草薙正夫訳、岩波文庫、1953、第一章第一部「抽象と感情移入」、pp.22-40、特に pp.38-39。但し、岩波文庫における著者表記ヴォリンゲルは変更している)。ヴォリンガーのその新しい概念は、写実的絵画とは異なる原始絵画や装飾芸術を説明する美的原理として幾何学的抽象性を主張し、その刊行直後に噴出する20世紀抽象絵画の新しい潮流を準備かつ解明する美的理論として大きな影響力を発揮したものである。

かくしてこの抽象的・合法則的形式は、それによって人間が世界像の無限な混沌状態に直面して平静をうることのできる唯一にして最高の形式なのである。(ヴォリンガー、p.38)

そこで吾々は次の如き命題を確立する——単純な線や純粹に幾何学的な合法則性におけるその発展的形成は、現象界の不明瞭な混沌たる状態によって不安を感じている人間に対して、最大の幸福可能性を提供したに相違ないと。というのは、ここでは生命の複雑さと生命の依存性が僅かの残滓をも止めないまでに払拭されているからである。即ちここでは最高にして絶対的な形式、還元すると、最も純粹な抽象が獲得せられているからである。またここには法則があり、必然性があり、それ以外の場所においては有機体的恣意があまねく支配しているからである。(ヴォリンガー、p.39、下線は高橋)

恐怖を惹起する具体的で不確定な現実の衝迫に対して、精神を庇護する美的な膜をそこにめぐらせ、抽象的につむぎだされた繭のような虚構的亜空間の内部において、自己主体は自由をか

らくも保持かつ享受することができるのである。

ルーマンでは、差異と変態でしかない世界と、非変態であるシステムとの間に重要な切れ目（差異）を入れる「美的是認」についてのリアルな形象が看過され、欠落しており、そこにニーチェとの決定的な違いがみられるが、しかし、抽象衝動の駆使による亀裂の創出という意味では、基本的な事情はルーマンにおいても同じで、複雑性（世界）の縮減、すなわち無限の具体的な複雑さからいくつかのみを恣意的に選別して単純化し、それを短絡化するという抽象化操作が、手練手管を弄して遂行され、それによって独自の自律した社会システムという亜空間システム（人工の宇宙ステーション）が築きあげられていく。あるいはより正確には、社会システム自体が、世界から自己を防御するべくそれ自体が生態的な生き物のように、自律的に自動的に自己を生み出し増殖していく。人々が集う組織、その組織が集結する社会という生き物は、システムとして、すなわちシステムと環境とが手を組み二人三脚で走る不即不離の装置 System として、世界の襲撃をかわすためのセーフティ・ネットが形成される。共闘的に陣地を築けばまさか世界 Welt も襲ってはくるまい、と秘かに祈ったわけである。事実、その抽象的システムが誕生した瞬間、恐怖世界は人の視界からきれいに消去されて不可視化し、そもそも存在しないものへと隠蔽される。

そして、その世界という具体的なものが私たちの眼にも可視化されるのは、システムという抽象的な安全化検出装置をくぐらせ、抽象的なものへとまずは変質（一般化）させた後のことでしかない。抽象的変質とは、いうまでもなく、絶対的な危険性をもつ破局や無限の複雑性 Gefahr-Katastrophe を、まずは危険 Gefahr と名づけてその毒性を弱めた後に、それをさらに計算可能なリスク Risiko へとすりかえ、馴致度を高めていく縮減操作のことをいう。真正の危険すなわち破局が、その二段階のすりかえ（縮減）によって曖昧化され、あつてほしいと願う幻の安全の極の方へと徐々にずらし、弱性化されていく。荒海からやってくる黒い奔騰する大津波という具体的なものの極みを前にして、人は、絶望に耐えてしっかりと眼をつぶり、抽象性を動員しては、大津波の一部だけを戦慄をおぼえながら汲みあげる。大津波の本来の恐怖の闇の色は、抽象化という浄水器で大いにその毒性を抜かれ浄められており、やや灰色に濁ってはいるものの、もはや深い恐怖を引き起こすことのない水の揺れとして自身のまわりにめぐらせる。「洞窟の比喻」と同様、洞窟の壁面に影絵が縦横にめぐらされる時、人々は心からの安心、安寧に浸りえたのである。

14. ありそうになさの公理

抽象絵画の祖カンディンスキーがそうであったように、20世紀初頭の抽象絵画の誕生は、当時の人々の強い危機意識に照応するものであったが、ヴォリンガーに従えば、恐怖世界への感度が高いほど抽象性への志向はより必然となる。そうした抽象性を追求する強い志向は、ルー

マンでは、社会システム理論という極めて理論性の強い探求となってあらわれるだけでなく、さらに「ありそうになさの公理」あるいは「不確定性の公理」とルーマン自身が命名したその方法論においても、顕著に露見することになる。小松丈晃は、ルーマンの論考「社会学概念としてのオートポイエーシス」Autopoiesis als soziologischer Begriff、1987（馬場靖雄訳、『現代思想 特集 オートポイエーシス』vol.21-10、1993、pp.109-130）に基づいて、ルーマン自身が意識的に採用した方法論を次のように解説している。

ルーマンによれば、おおよそ何らかの学問を開始するにあたっての、いわば「学的関心の『ハビトゥス』」には、二つの方向性があり、ルーマンはその一方に積極的にコミットする。まず、

- (1) 「正しいもの」を仮定しておいて、そこから逸脱する現実を目を向けるというやり方であり、
- (2) もう一つは、現にあるものがそのようなかたちで現にあることにまず驚き、現にそのようにあることのありそうになさ（Unwahrscheinlichkeit）を仮定することから始めて、そうであるにもかかわらず、なぜ形式（秩序、構造など）が現に可能となっているのか、と探求するやり方、である。

この第二の立場が、ルーマンによって「ありそうになさの公理」（Unwahrscheinlichkeitstheorem）」と呼ばれているものであり、ルーマンの社会システム理論が依拠する「ハビトゥス」にほかならない。

（小松丈晃『リスク論のルーマン』、勁草書房、2003、p.19、典拠箇所の削除、下線、改行、空行設定は高橋）

第二の立場は、「ありそうなことの中に、ありそうになさの痕跡を見いだそうとする」アプローチである。つまり、当事者にとっては当然のことで半ば「自然」なこととされていることが、いかに「ありそうにない」ものであるのかを明らかにするわけである。要するに、「[当事者にとって] ノーマルな状態の仮象を打破すること、現行の経験や習慣に／ついで批判的に考察すること」が問題となる。これはまさに現象学を彷彿とする言明だが、じっさい、ルーマン自身がこうした「ありそうになさの公理」を説明するにあたって、「（超越論的な意味合いにおいてではないが）現象学的還元が、重要なのである」と述べている。

（小松、pp.19-20、典拠箇所の削除、下線、改頁の印／は高橋）

ここで「ありそうになさの公理」Unwahrscheinlichkeitstheorem と呼ばれているものは、佐

藤勉監訳『社会システム理論』「第三章 ダブル・コンティンジェンシー」第三節では、「不確定性の公理」(pp.176-180)と訳されていたものである。その第三章とは、実は、危険な不確定性が安全な不確定性にすり替えられる「ダブル・コンディンジェンシー (二重不確定性)」というパーソンズゆかりの奇妙な概念に基づいて、社会システムという仮象 Schein が起動するその原初的道筋、正確に言えば社会システムが捏造される礎石があからさまに究明かつ是認されている驚くべき章である。してみると、ルーマンは、「ダブル・コンティンジェンシー」による「人間的な、あまりにも人間的な」すりかえ操作を仮構し是認すると同時に、そのすり替えによって築かれ存立しているシステム群のあやうい仮象性を幻想破壊するという逆の操作もまた、そこに随伴させていたことになる。みずからは仮象構築原理をつくりだしながら、その原理によってつくられている現状の仮象たち(組織、システム)を破壊する相反する二重の操作を、その第三章では論じていたわけである。

この引用にいうノーマルな状況の仮象打破という批判的破壊的な方法論は、ルーマンの思索の主要な源流であるフッサール現象学になかば由来するものであることはいうまでもないが、それでも、フッサールの現象学からは、そのように過激な仮象打破の姿勢が導きだされるわけではない。仮象打破という方法論は、それよりはむしろルーマンと同時代の文学において過激に追求されていたものである。

20世紀初頭のドイツでは、破壊にいそしむダダイズムやドイツの表現主義、カール・クラウスによる激しい風刺や人類破滅劇(『人類最後の日々』1922)、ロシア・フォルマリズムの異化概念と19世紀ウィーン民衆喜劇の喜劇作家ネストロイの毒こもれる喜劇的伝統とから批判考察的な異化演劇を創出したブレヒト、宇宙の不条理なからくりや偶然の悪意にからめとられて破滅する社会や人間たちを、世界破局という最終的な鏡に照らしてグロテスクに悲喜劇化し、仮象破壊を過激に行ってみせたスイスの同時代人、劇作家デュレンマット等の創作に、その豊かな先例をみることができる。

なかでも、ルーマンより6才年上の同時代人、フリードリヒ・デュレンマット(1921-1990)のドラマトゥルギー(劇作法)は、平衡系の秩序を志向するニュートンやブレヒトたちのHypotheses non fingo(我、仮説を虚構せず)を意識的に反転させたHypotheses fingo(我、仮説を虚構する)というもので(Friedrich Dürrenmatt, Standortbestimmung zu 《Frank V.》, 1960. In: Friedrich Dürrenmatt, Theater-Schriften und Reden, Arche, 1966, S.184)、不確定的世界(非平衡系)の確定的世界(平衡系)への侵入光景を基本とする戯曲『貴婦人故郷に帰る』Der Besuch der alten Dame (Arche, 1956)や、リスクの知的回避が最悪に可能な展開を引き寄せる『物理学者たち』Die Physiker (1962)等において、パラドックスの罠にかかって破滅する人々や社会の不条理を描いていった。黙示録的な世界光景が描かれ、不確定性や偶然の支配するデュレンマットの作劇法の背後には、第二次大戦後、一つの揺るぎない様式 Stil はすでに失われており、現代の劇作家がとりうる唯一の道は多様な複数の様式 Stile の実験につ

ぐ実験、不連続に連続する綱渡り的な実験行だけである、とする明確な認識がある(『演劇の諸問題』 Theaterprobleme, Arche, 1955)。

特定の統一的な様式 Stil というものはもはや存在せず、あるのはただ複数の様式 Stile のみである。(Friedrich Dürrenmatt, Theater-Schriften und Reden, Arche 1966, S.20)

かくして現代の演劇は二つに分裂する。博物館か、実験場かに。(ebd. S.19)

ここにいう Stil 様式とは、いうまでもなく後にリオタールが「大きな物語」と命名し(『ポスト・モダンの条件』書肆風の薔薇、1986)、社会学者大澤真幸が『不可能性の時代』(岩波新書、岩浪書店、2008)において「第三の審級」と呼ぶことになる統合的なパラダイムのことであるが、そのような統一的様式の消えさった現代社会において、私たちを圍繞し翻弄するのは、不確定性と偶然 Zufall とが連動した危険な跳梁世界だけでしかない。平衡系が非平衡系に反転し、平衡系の安定したノーマルな領域の中に、非平衡系的な偶然や不可知の神意が隕石のように落下し、制度的仮象(システム)を破壊する(デュレンマット『隕石』、Friedrich Dürrenmatt, Der Meteor, Arche, 1966)。災厄、偶然、不確定性が、その絶対的支配力を見せつけるのである。

不確定性ビジョンの先達にして範例であるデュレンマットは、偶然のみが飛びかうそうした意味なき世界の中において、その世界に対し虚構によって距離をとる。とともに、その世界そのものにならない、偶然をみずからの方法論とする。偶然 Zufall を人間世界に導き入れ、地上性を壊滅させることではからずもその彼方を人に遠望させる不可知の神の意志を、偶然 Zufall に置きかえ、偶然によるカルデロン式世界劇場 Welttheater を現出させる。隕石 Meteor のように忽然と襲来する根拠なき偶然は、デュレンマットにおいて演劇や創作の着想 Einfall や仮説 Hypothese へと呼び名を変えられ、確定性の幻影に浸る人間世界の中に落下してきては、きのこ雲を空に浮かびあがらせる原爆と重ねられる(Theaterprobleme. In: Theater-Schriften und Reden, Arche, 1966, S.121f.)。人間たちの日常は、その予告なき理不尽の襲来によって、社会という仮象的な根拠と実体から引きはがされ、非現実的なきのこ雲の中に、孤立したものとして閉じこめられ、そのあやうい根拠なき実態こそが視覚化される。災厄である偶然を多様に導入、逆用することで、デュレンマットは、偶然と不確定性しかない現代世界の光景に、彼自身何とか対抗しようと試みたのである。

15. Hypotheses fingo (仮説を虚構する)

この悲劇的な世界認識と、それを逆転させる逆説的な方法論を、ルーマンもまた継承してい

る。世界が不確定性の渦でしかないのであるならば、その不確定性 *Unsicherheit* をこそ逆手にとって世界への反抗が企てられうる。不確定性の極性を反転させて、脆弱な人間たちが生きるために築いてきた社会システムの生成原理を、その災いの不確定性をキーワードとして解読し、社会存立の強さの根拠をその不確定性によって逆説的に創出しようと、みずからも試みたのである。

混沌とした複雑性の海である世界や自然、現実に対峙する時、人が第一になすべきことは、その現実の複雑性や眼もくらむ無限の変態状態に、わずかであれ抽象的な亀裂を入れ、距離を取ることである。デュレンマットは、創作をはじめた動機が、「私を領しているイメージに、当初はたとえほんの些細なものであれ、距離を、少なくとも自分がいくらか息づきすることのできる距離をつくりだすこと」にあったと告白している（Friedrich Dürrenmatt *Werkausgabe*, Band 18, *Aus den Papieren eines Wächters, Frühe Prosa*, Verlag der Arche, 1980, Anhang, Anmerkung I.『ある看守の遺稿から 初期散文』巻末の注釈 I. この注釈が書かれたのは1952年）。

具体の極みである世界に、具体とは対極にある抽象性 *Abstraktion* が亀裂を入れる（ヴォリンガー『抽象衝動と感情移入』）。デュレンマットが、世界の迷宮性氾濫に対して虚構と哲学によって距離を取ろうとしたとすれば、ルーマンは、その一般化、単純化、縮減という抽象性を浮力として具体的な不確定性の渦である世界に距離をとり、不確定性の極みである世界への反重力装置や免疫として、彩りをやや抽象的に変えた疑似不確定性 *Pseudo-Unsicherheit* を導入し、それを具体的な恐怖の世界（真正不確定性）にあらがう武器（アイテム）として逆用しようとする。ルーマンという不確定性に囚われていた「洞窟の比喩」の囚人は、抽象化（単純化、縮減）によって晴れて新装開店になった疑似不確定性すなわち *Kontingenz*（半ば毒抜きされた疑似不確定性）に、自由と安心への希望と光をみだし、（アイデアの）光に向けて「回首」（漱石）しようと謀る。あまりの不確定性という絶望的状况を前にしたルーマンが、世界というその無限の不確定性の坩堝の中から、わずかにだけ、いわば池ひとつ分ほど汲みあげられた有限なる不確定性を、抽象化（短絡化）によってその毒性を極度にうすめ、“危険（破局）” やリスク、不確定性（コンティンジェンシー） *Kontingenz* という魅力的な名を与えて、多様に編集する。少量の毒（疑似不確定性）でもって巨大な毒（真正不確定性）に対応しようとする。減数され抽象化された不確定性というこのジェンナー式種痘免疫方式のつつましい応用によって、破局的な不確定性の大規模な氾濫に対抗しようと、壮大かつ、けなげに夢想したのである。

かくして、ルーマンのすべての基礎となる基底的な意味システム、個々人である心理システムの隠れた礎石部分には、そのような抽象化された疑似不確定性（コンティンジェンシー）が装填される。その個々人たち、すなわち心理システムが複数対峙するいわば社会システムの起点にも、倍乗された不確定性という名の、但し実際にはこれまた抽象化された疑似不確定性が、すなわちパーソンズの社会システム理論の中心概念を踏襲した「ダブル・コンティンジェンシー

（二重不確定性・二重偶発性）」die doppelte Kontingenz が周到に装填される。不確定性のそうした抽象的な逆用によって社会システムが起動する。そして、その諸社会システム群の乱立するシステムの摩天楼群間にも、その抽象化された不確定性というジェンナー式免疫は、コンフリクト（葛藤）Konflikt と命名されて暗躍することが期待されていく。

ルーマンは、ヘーゲルの『精神現象学』（平凡社ライブラリー、2007）を踏襲し、その矛盾概念に自身のシステム構築へのキー概念を見たが（『社会システム理論（下）』佐藤勉監訳、p.674）、ヘーゲルにおける矛盾は、ルーマンでは、抽象化された不確定性へとその姿を曖昧に、いかがわしげに変えられ、現代社会が現在その中に置かれている破局を、これから襲いかかってくる破局を人類が生きのびていくための希望がそこに託される。無限の不確定性世界に屈することなく反抗するルーマンの、巨大な石（理解 Verstehen、システム）を山上に押し上げるギリシア神話の囚人シジフォスにも似た、社会システム理論構築の壮大な旅がはじまるのである。

「Hypotheses fingo（仮説を虚構する）

—— ルーマンの不確定性三変化 その2」 に続く

（2011年6月20日受理、2011年8月3日最終原稿受理）

Hypotheses fingo —Luhmanns drei Verwandlungen der Pseudo-Unsicherheit in “Soziale Systeme” von 1984. Teil I

Hypotheses fingo —Luhmann’s Three Variations of the Pseudo-Uncertainty in *Social Systems* of 1984. Part I

《SUMMARY》

Hypothesen fingo — Luhmanns drei Verwandlungen der Pseudo-Unsicherheit in “Soziale Systeme” von 1984. Teil I

Yoshifumi TAKAHASHI

Das Erdbeben vom 11.3.2011 in Ostjapan stellte uns sowohl die ungewöhnliche Gewalt der Natur als auch die Ohnmacht und die Arroganz der Menschen bloß, die das schwer Kontrollierbare zu bändigen wagten. Die europäische Welt postuliert dort jenseits der Phänome auf der Erde eine übernatürliche Sphäre der himmlischen Ideen, die über die Herrschaft der dionysischen Gewalt hinaus für das Unveränderliche garantiert, und wünscht sich dadurch eine Erlösung und Sicherheit.

Einer der größten Denker der heutigen Zeit, Hans Blumenberg, der unter dieser Welt den “Absolutismus der Wirklichkeit” versteht, welcher uns schließlich nichts als Katastrophen mit sich bringt, orientiert sich auch am platonischen “Höhlengleichnis”, wie der schweizerische Dramatiker Friedrich Dürrenmatt, dessen Komödien sich unter den apokalyptischen verzweifelten Visionen entfalten.

Der deutsche Soziologe Niklas Luhmann, dem es in erster Linie anliegt, um der Sicherheit der menschlichen Bereiche willen angemessene Maßnahmen gegen die gefährliche Welt zu ergreifen, stützt sich ebenfalls auf das “Höhlengleichnis”, wo man sich blindlings in der Finsternis der äußersten Komplexität der Welt und aus der Furcht davor verirrt. Sind uns dann nur Katastrophen und Gefahren, keine Zukunft, gegeben?

Jeder der drei Gigantsterne am Himmel der Finsternis, Blumenberg, Dürrenmatt und Luhmann, gewinnt in seiner besonderen Art und Weise zur gefährlichen Welt Distanz, Blumenberg mit (absoluten) Metaphern und Mythen (“Arbeit am Mythos”) und Dürrenmatt mit Einfällen und Hypothesen. Denn die einzige Methode, sich gegen die Welt und den “Absolutismus der Wirklichkeit” einen gewissen Abstand zu erschaffen, liegt nicht im Konkreten, sondern nur allein im Abstrakten, falls die Welt aus der konkreten äußersten Komplexität besteht. Diese abstrakte Strategie, die der deutsche Kunsthistoriker Worringer in seiner “Abstraktion und Einfühlung” von 1908 die “Abstraktion” nennt, beschwört zuerst eine schmale Ritze, dann aber einen unabhängigen freien künstlichen fiktiven Raum, der die Menschen auf die Beine stellt.

Solch eine Abstraktion wird bei Luhmann durch Systeme geschaffen, indem man die äußerste Komplexität zur begrenzten kleinen Komplexität reduziert. Man tauscht nämlich die Komplexität der Welt heimlich mit der Pseudo-Komplexität aus, die von der Zahl her weit abstrakt reduziert wird, so dass sie nun als zählbare Risiken und wenn auch mühsam, aber irgendwie von Menschen kontrollierbare Unsicherheiten erscheinen könnte. Erst nach der abstrakten willkürlichen Wende und auf der unbegründeten Urbasis der Abstraktion wird die neue Unterscheidung der Welt/Umwelt/System eingeführt und das System als Sicherheitsnetz in Gang gesetzt, was zur großen Entwicklung der apollinischen Kultur der Sicherheit führt. Nur die Zauberkunst ohne Begründung vermittelt der Pseudo-Unsicherheiten, die Luhmann in "Soziale Systeme" von 1984 die Kontingenz oder die doppelte Kontingenz tauft, hintergeht die Welt und schützt Systeme.

Ein System, das sich fast mit dem Selbst des Subjektes identifizieren könnte, umgibt sich mit einer Umwelt als einem tiefen Schlossgraben mit vielen gefährlichen Risiken, welche uns zwar einigermaßen anstrengen, uns aber auch damit die Sicht auf die Gefahren so versperrt, als seien echte Gefahren und Katastrophen nicht mehr vorhanden.

Der strategischen Unterscheidung entspricht das Luhmannsche berühmte Schema des Risikos, d.h. das Risiko/Gefahr-Schema. Es tritt erstmals am Ende des 20. Jahrhunderts an die Stelle des früheren Paares in der Risiko-Forschung, Sicherheit/Risiko, und ist jetzt schon weit anerkannt, weil es in heutiger Zeit nichts Sicheres mehr, sondern nur relativ scheinbar Sicheres und echte Katastrophen gibt.

Die Strategie des Systems zielt vor allen darauf, die Gefahr der Welt aus der Sicht verschwinden zu lassen und vor sich selbst die gefährliche Wirklichkeit zu verbergen. Auch die Operation der Verheimlichung in der Urphase muss aber den Mitgliedern des Sozialsystems geheimgehalten werden. In diesem Sinn enthüllt sich das Luhmannsche System im Grunde nicht als Risiko/Gefahr-Schema, sondern als eine doppelt-verbergende Vorrichtung, im Urproblem gegenüber der Welt und auch im sekundären Problem der apollinischen Erweiterung und Erhaltung des Systems.

Diese vorliegende Abhandlung, Teil I, der eine Einführung und Vorschau ist, schließt sich an den Teil II an, in dem ich den Trick der Pseudo-Unsicherheit in den 2. und 3. Kapiteln der "Soziale Systeme" von Luhmann erörtere.